



<http://www.megururi.net>

ちょっと、ざわざわ、しに行く。

めぐるアート 静岡



megururi.net

ざわ、しに行く。

アート 静岡

ue. - 2/14 sun.

会場、8名の作家

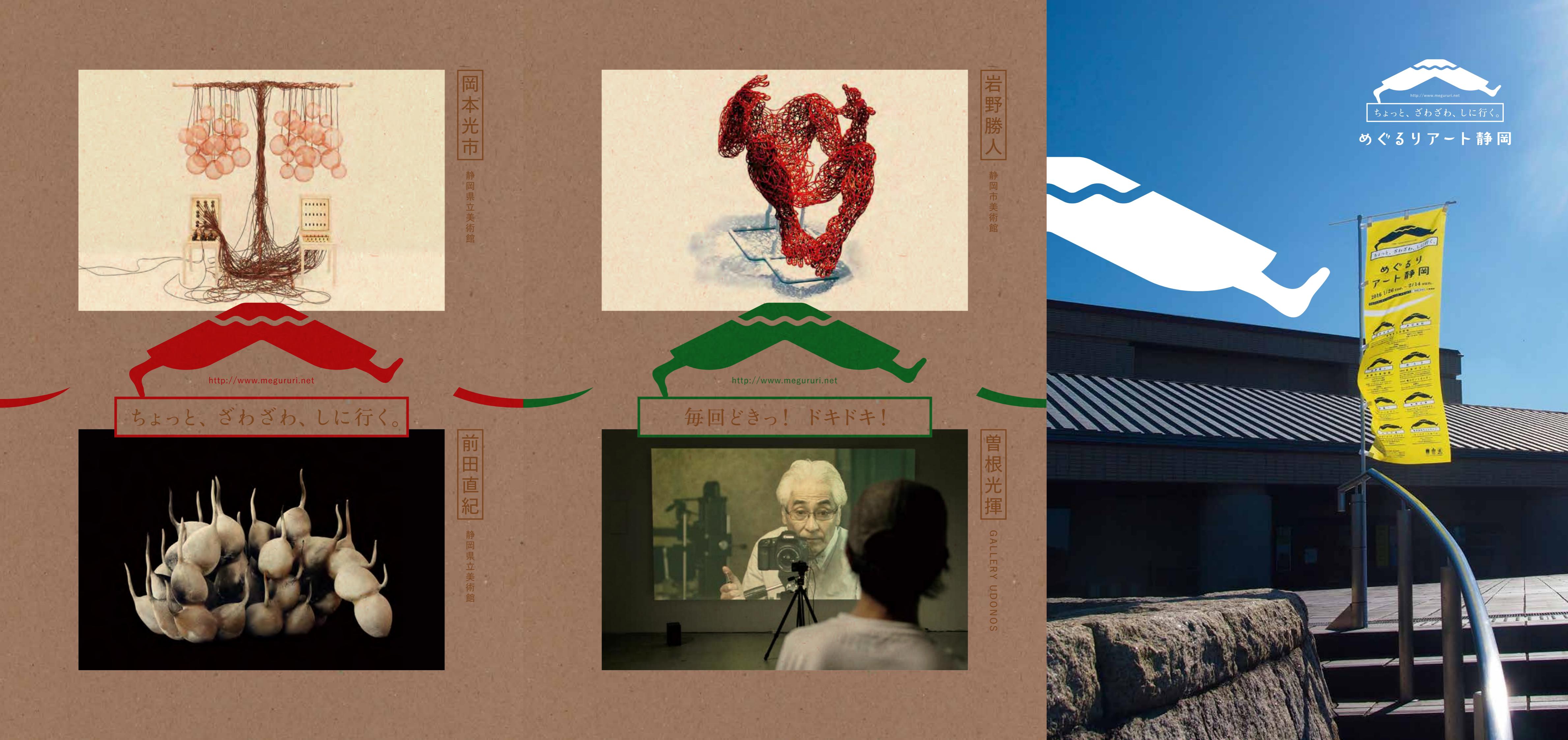
*一部会場、別会期

- 02 ごあいさつ
- 03 展覧会趣旨
ちょっと、ざわざわ、しに行く。
- 04 作家紹介
- 08 会場と展示
作家プロフィールと作家コメント
- 24 実習記録
- 26 受講者企画によるキュレーションの実践
- 27 アーティストトーク／めぐるリツアー
- 28 広報・広告戦略とツール
- 30 来場者の声
- 31 受講者メッセージ
- 32 実習の成果と課題



ちょっと、ざわざわ、しに行く。

めぐるりアート静岡



「めぐるアート静岡」は、今を生きる作家を紹介する展覧会です。8名の作家が、この土地との交わりを多様な切り口で表現します。静岡市内7会場と浜松市内の1会場は、ここに集う作家のさらなる飛躍を見届ける舞台になることでしょう。美術館からギャラリーや映画館まで、チラシを片手にめぐってみませんか。いつもの街が、「ちょっと、ざわざわ」しています。

また本年は、メイン・キャッチフレーズに加え、三つのサブ・キャッチフレーズを用意しました。「毎回どきっ！ドキドキ！」、「あるくるつなぐ」、「明日は誰とめぐりましょう、うふ」の三つです。それらのフレーズは、この展覧会で繰り広げられる表現と、観客との出会いのカタチを暗示しています。

本展は、静岡大学が平成25年度より開講した「アートマネジメント力育成事業」（平成25、26、27年度 文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」）の一環として企画されました。同事業は、静岡大学が、近隣の文化機関と連携して、地域の文化施設に勤務する職員、そして学校教員、市民、学生などを対象に、広く開かれた形で、体系的かつ実践的なアートマネジメントの研修プログラムを提供しようとするものです。本展は、その美術分野の実習として受講者とともに創り上げられました。

また本展は、「アートを媒介に、静岡の過去と現在、場と人を結ぶ術を考える」ことをテーマに、平成25年3月に静岡市内6会場で実施された展覧会「むすびじゅつ」（静岡県立美術館による財団法人地域創造「アートミュージアムラボ」関連事業・静岡アート郷土史プロジェクト芸術批評誌「DARA DA MONDE」派生企画）を発展的に継承しています。

最後になりましたが、美術展でありアートマネジメント力育成事業でもあるという、二つの相を合わせ持つ本企画への参加を快諾してくださいました作家の皆さん、また全面的にご協力いただいた各会場の関係各位に、この場をかりて篤く御礼を申し上げます。また本展のキュレーションおよびアートマネジメント力育成事業の両面にわたって、専門的な知見を惜しみなくご提供くださいました講師の皆さん、そしてこのプロジェクト実現に向けて意欲的に取り組まれた受講者各位に深く感謝の意を表します。

「めぐるアート静岡」が、若い作家に勇気を与えるとともに、私たちに新たな出会いをもたらし、地域の活力を高め、また心豊かな社会の実現に資することができれば幸いです。

2016年3月

静岡大学・静岡県立美術館・静岡市美術館

ちょっと、ざわざわ、しに行く。

展覧会の概要

『めぐるアート静岡』は、「静岡から芸術を発信する場の創出」を目的としている。「場」とは、今までなく会場だけをさすではなく、時代、文化・芸術への問い合わせ、地域との関係性など、全てを含むものである。会場としては静岡市内の公立美術館、民間のギャラリー、映画館などの特色を異にする7カ所、そして浜松の鴨江アートセンターを加えた8カ所をつなぐたちで実施された。また本展は、文化庁助成・静岡大学「アートマネジメント力育成事業」における、美術展企画運営の実習としての側面も持っている。展覧会準備の各段階を受講者に公開し参画を促すことで、その実践的なアートマネジメント力を育成するものである。

展覧会のキュレーションは、同実習の講師6名が行った。また今年は初めて、受講者提案による企画が静岡県立美術館会場で開催された。作家ノミネートにあたっては、作家・作品が静岡の地と何かの縁で結ばれていることと、自らのアートの種子を見つけ、芽吹かせ、開花させつつある、若い世代の作家を軸とした。いずれにしても本展は、この地がクリエーターを生み育むことを示し、また域外のクリエーターとの活発な交流が繰り広げられる磁場であることを示すものである。

芸術を発信する場

アートは、はじめから立派なもの、華やかなもの、見事なもの、洗練されたものばかりではない。それは、捨てられたものから豊かな意味を紡ぎ出し、ありふれたものが放つ光を捉え、忘れていた大切なことを思い出す技でもある。日常のなかにありながら気づかない、あるいは気づいていても言葉にできない思いや感情を、作家は様々ななかちやすく取り、それぞれの方法で眼に見えるものにする。そしてそれは、世間体や利害得失の境を超えて、作家の心の奥底を映し出す「鏡」としてきた。しかし鑑賞者にとって、その鏡に映し出されるのは作家と鑑賞者との関係性であり、また作品を見る者、すなわち私たちの心に他ならない。

それらアートとの接し方、またその体験の質は、出会いの度ごとにゆれ動く。それはいわゆる「高名」な作家の作品であろうと、「無名」の作品であろうと変わらない。「芸術を発信する場」の創出にあたっては、それら多様なアートを、いわば「無名」のもののように提示することから始めたい。それはそれら作品や行為自体、すなわちアートの力を信じているからに他ならない。それぞれ異なる特色を持った8会場では、まずは作家・作品と会場・空間との出会いがあり、次にそこを訪れる人々との出会いがある。展覧会とはそれら全てについて、その度ごとの出会いのカタチをつくりだし、それを常に瑞々しく保つ装置である。今回は前回までも増して、出会いのカタチ、すなわち作家やジャンルの多様性と会場における展示の柔軟性について、その幅の拡大が図られた。

体を表すことは

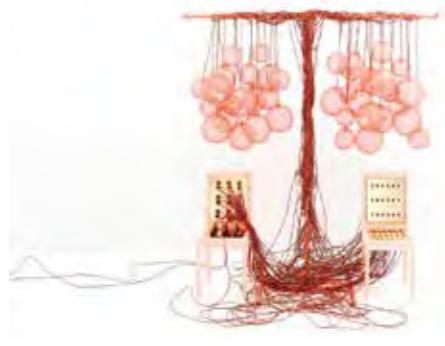
本展では、メインタイトルとして「ちょっと、ざわざわ、しに行く。」を掲げた。また、「毎回どきっ！ドキドキ！」、「あるくるつなぐ」「明日は誰とめぐりましょう。うふ」という三つのサブタイトルを用意した。それらは、アートマネジメント力育成事業としての、実習の受講者が立案したものである。そしてそこでは展覧会の趣旨を踏まえつつ、できるだけ分かりやすく親しみやすい言葉に落とし込むことが目指された。地域に散在する会場を「めぐり」と（ぐるりと・めぐる）する回遊性の展覧会であるということ。会場として美術館あり、古い店舗や社宅ビルをリノベートしたギャラリーあり、かつての警察署建物を生かしたアートセンターありと会場自体に際立った個性があり、またそれらの取り合せに特色があった。それら会場また街は「芸術」の異化作用によって、その来歴、また現在・未来にわたる複合的な意味が呼び醒まされる。「ちょっと、ざわざわ、しに行く。」この言葉には、アートとの出会いによって、私たちの心の扉が押し広げられてゆくときの期待感が込められている。

めぐるアート静岡

回遊性の展覧会という意味では、これまでの3年間で、展覧会マップの製作と各会場をめぐる展覧会ツアーを行った。実施初年度（平成25年度）のマップは、受講者の企画製作によるもので、スタンプラー機能を持つだけでなく、イラストによって静岡の歴史的な記憶スポット、かくれた名所、ユニークな店舗を紹介するなど、各会場を起点に宝探しのような街歩きを呼びかけた。展覧会ツアーは、ナビゲーターを立てて、街の記憶スポットなど、かくれた名所を回遊するものである。移動手段としては、徒歩／自転車／マイクロバスなどが想定された。予算、安全性、雨天対策といったハードルもあり、2年間にわたって見送られてきたが、3年目にして同種のツアーについて経験値の高い受講者の参加によって実現の運びとなった。結果的に、徒歩による静岡市中心部のみの限定的な実施になったが、今後、芸術を発信する場の活性化と地域リソースの掘り起こしについて、より多面的な回路が開かれることを期待したい。

アートを生み出す力やそれを受けとめる力は、私たち一人ひとりの中に潜在している。静岡に縁のある作家が、全力で取り組みたくなる発表の機会を作ること、またその仕事をより多くの人々に伝えること。そしてそこから共感や驚きや疑問など、様々な反響が巻き起こることが望ましい。静岡大学アートマネジメント力育成事業では、受講者募集にあたり「アートの力で、わたしが変わる。地域が変わる。」と呼びかけた。そして、その変容の舞台の一つとして、『めぐるアート静岡』を実施した。

岡本光市



《lighting chair》2012

ジャンルを横断する個性

エントランスホールに展示する、岡本光市の《magnetic field record》は、4本の脚が支える振り子の構造をした立体作品である。色と形の余分な要素はそぎ落とされ、物質感は最小限に抑えられている。磁石の力で、針が回転し、針の先端に取り付けられたタンクから滴る墨汁によって、床面の紙の上に回転の軌跡が残されていく。墨が描きだす軌跡としてのドローイングは、あらかじめ計算することができないスピードと回転の方向によって無数のバリエーションを生む。音楽を感じさせる線と点との組み合わせは、楽譜あるいは、レコード盤を想起させ、白と黒とのシンプルな対比が、鮮烈な印象を放つ。

この立体物を創作することに岡本に向かわせている動機は何だろう。偶然性とともに生じた行為の結果として、平面のドローイングを作りだす事であろうか。いや、それ以上に、重力や磁力といった現象を、オブジェクトとして実体化することが、強い創作のモチベーションになっているのではないかと思う。目では捉えにくい現象を視覚化し、実体化する装置を創りだす好奇心、シンプルな形と色へのこだわり、素材のユニークさが、岡本の最大の特徴といえよう。

この岡本の個性は、今回、名品コーナーに展示する、光をモチーフにした、3つの作品にも脈打っている。《weight of the light》で、天秤の錘として用いられた石と、バランスを保っているのは、光である。光にも質量があることを視覚化するとしたら？という問い合わせからひらめいた作品である。《shape of electric transmission》では、板や立体の様々な形状をした鉄が、積み木のように積まれ、その接觸点を伝って、電球のバルブへと電流が流れている。鉄の平らな面が、見慣れない形状のソケットの役目をし、電球は、煌煌と光っている。

岡本は、音楽の領域から表現活動を始め、1990年代末にCDリリースのため訪れたオランダで、ダッヂデザインのムーブメントと出会った。大量生産に抗い、作家の個性に重きを置く創造の精神は、子どもの頃から実験好きであった岡本の性質に合致し、以来、素材に既製品や、廃材を取り入れたデザインワークを発表し、国内外でプロダクトデザイナーとして、高い評価を得てきた。近年は、自力で切り開いてきたデザイナーとしての足場から、より自由な表現領域へと活動を広げている。

今回、わずか1週間の期間限定ではあるが、県民ギャラリーで発表される新作、《re-rain》が展示される。静岡に降る雨をサンプリングして作る、驚きに満ちたサウンドインスタレーションは音楽、デザイン、アートの領域を自由自在に横断する、現在の岡本の個性が最大限に発揮された作品となっている。

前田直紀



《Spider's thread》2013

轆轤から生まれる 器と祈りのかたち

前田直紀は、オブジェや器を作る陶芸家としての活動のほかに、セラミックコミュニケーターとして国内外でワークショップを開催し、制作工程を他者と共有することに意義を見出している。本展覧会でも、前田だけが受講者企画という枠の中で展示を構成しており、企画、制作、設営、運営の全般に渡ってプロデュースチームが関わっている（主要メンバー、大石、光後、近藤、中村ほか）。映像効果にも谷正輝の《Spread》を取り入れるなど、この展示が、作品を中心に据えながらも、受講者とのコミュニケーションの中で形作られている点は、前述した作家の姿勢とも通じるところである。

前田は制作の際に轆轤を用い、同じ土の塊から、器やオブジェを作りだす。この展示では、彼がこれまでに制作してきた陶器の破片を「器」の象徴とした。日常性の高い器ほど朽ちる速度も速くなる。碎かれた器は大から小へと並べられ、無常な時の移ろいを感じさせる。「祈り」の象徴としてのオブジェ《spider's thread》は、芥川龍之介『蜘蛛の糸』から発想を得た、救済を求めるかたちだという。轆轤で開いた器の間口を合わせるように閉じられており、中は空洞、魂のような捉えどころのないかたちを成している。前田はさらに、このオブジェに漆を塗り、県内各地の土を付着させ、素焼きの肌色にその土地の色を纏わせ、固有のものへと変容させた。

海外での公開制作を経験してきた前田にとって、仏教的な概念を作品に反映させることや、その土地の自然を付着させて固有化させるといった手法は、日本人として馴染みの深い感覚、宗教観や、アニミズムの精神を顕在化させる方法でもあった。

土からつくられた器は、古くは縄文時代から現代に至るまで、日常や祭事に用いられ続けてきた。土と人間の営みから生まれる、器と祈りのかたち。しかしどんなかたちであれ、いずれは割れて粉々になり土に還っていく。循環の中にいる私たち。閉じられたオブジェの中の空洞には、いつもならば作家の祈りや想いが込められているわけだが、この展示では、来場者自身がオブジェを手にすることで何かを感じとってもらいたい。過去から現在、そして未来へ向かう時間の流れの中、今この場所で、祈りのオブジェを手にしているということに想いを馳せて。

中村美穂子
アートマネジメント力育成事業 受講者企画「前田チーム」

岩野勝人



《HUGE FOOT 摩天崖に立つ》2012.9 隅岐・しおさい芸術祭 2012にて

岩野勝人と「MENTAL CHAIR」の20年

岩野勝人の「MENTAL CHAIR」（メンタル・チェア）は、太さ6mmの鉄筋を20～30cm位に切っておき、無数に曲げて溶接して作られている。一体作るのに一ヶ月半以上かかる力技である。人の形をした椅子として、実際に座ることが出来る。座ってみると、硬い鉄筋でできているのに体にフィットして意外と座り心地がいい。大きな人ならぬ人に包み込まれ、宙に浮くようである。真っ赤な色は全身に張り巡らされた血管を思わせるが、溶接時に溶けて輝く鉄の色として、エネルギーに満ちた色として選ばれている。

椅子は、人が座ってこそ椅子である。しかしこの椅子は「彫刻」であり、この「彫刻」は誰かが座って完成する。既に20年以上に渡って、さまざまな場所で展示され多くの人を受け止めてきた。人の形に頭がないが、「椅子に頭があったら、座ったときにいらんこと吹き込まれて休めない、頭は休めて欲しいから・・・」という20年前のコメントも、理屈が勝りがちな今の世の中、あながち冗談とも言えず作家らしくて面白い。それは、「もっと社会の中に入って行ける美術があってもいいだろう」という作家の考えを体現した作品なのである。

「MENTAL CHAIR」は、「なにあれ？ スゲー、カッコいい！」という子供たちの歓声を受け止め、恐る恐る体を預けた大人たちの心を寬げてきた。“町の小さなパン屋のような作家でありたい”と願った作家は、街の学校や山間の村、小さな島々に出かけ、ワークショップを行い、多くの出会いの場を生み出してきた。大学で教えるようになってから、学生を連れてますますその機会は増えた。昨年は中東のヨルダンにまで「美術」を届け出かけ、子どもたちの変わらぬ笑顔に迎えられた。

それは、国際展や世界のアートマーケットを賑わすアートとは違った、もう一つのアートの在り方である。アートは、人間の自由な精神を養うことが出来る。そして遠く虚構的な世界で繰り広げられるアートより、地に足の着いた身近な町のパン屋さんのようなアーティストの方が、地域の生活世界をよりよい方向に持つて行ける、この20年、岩野さんの活動はそんな希望を感じせるものだった。

「MENTAL CHAIR」も歴戦の勇士として、何度も塗り重ねられ、心なしか座り心地もより柔らかくなつたようである。

以倉新 静岡市美術館 学芸課長

曾根光揮



《写場》2014

現実(感)の彼方へ

多くの人がその時に驚きの声をあげる。私も曾根光揮の映像を使用したインスタレーション作品《写場》の鑑賞中に思わず声を発してしまった。その理由は体験してもらうこととして、この作品が興味深いのは映像に見られているとリアルに感じてしまうことだ。曾根は昨年東京藝術大学大学院映像研究科を卒業したばかりの若手映像作家である。在学中に発表したこの《写場》は幾つかのコンペを受賞し彼の出世作となった。高評価のポイントはさりげなく且つ効果的に鑑賞者が巻き込まれるインタラクティブな仕組みを備えている点だ。またそれが単に驚きを与えるのが目的ではなく、批評的なメッセージとして機能しているからだろう。

曾根は大学院に進学する前は静岡文化芸術大学でフルCGの映像作品を制作していた。そこでは現実と見間違うほどの映像を創り出すことに意識を向けていた。だが大学院で映像表現を学ぶうちに作品は現実（リアル）の忠実な再現ではなく、映像と鑑賞者の関係性を映し出すものになっていた。それは現実感（リアリティ）の所在への関心である。写真が眞実を映し出さなくなつて久しいが、テクノロジーの発達により映像もまた眞偽を確かめるのが困難となっている。映像が現実を装うことが可能な時代に、映像作家として何を伝えていくのか。《写場》はトリックの鮮やかさに目を奪われがちだが、そのような問題意識が透けて見える。

現代は映像と密接に繋がった時代であろう。テレビやWEBだけでなく、日常生活のあらゆるところにモニターがある。私たちはあまりにも慣れすぎて、普段映像の真偽など考えずにとても無防備に画面を見つめている。曾根は作家活動とともに映像制作会社で仕事をしているが、その影響力や視聴者の無自覚さを実感しているはずだ。ゆえに映像とどう付き合うかという課題が作家として重要なものとなるだろう。

映像が簡単に捏造されることが自明となった今、リアルであるかどうかはしたいした問題ではない。どのようなリアリティを与えられるかも同様だ。その意味では本物と偽物が等価の時代だと見えるのではないか。曾根はその間を往還しながら創作していく。超複製技術時代の不確かな映像から何を受け取るのか。作品は私たち一人ひとりにそう問いかけている。

柚木康裕 オルタナティブスペース・スノドカフェ代表

成実憲一



《ツムルツナガル ポートレート》2016

わたしたちのまち×アート×いろいろなひと

成実憲一は、京都の障害者施設で働きながら、ヴァリアス・コネクションズというアート・プロジェクトを展開している。それは、障害のある人がアートを通して社会とつながるために、成実によって立ち上げられた市民団体である。

「わたしたちの住むまちには、いろいろなひとがいます」、これは昨年2月、そのヴァリアス・コネクションズが開催した『ヤマシナポートレート』展のコピーの言葉。そしてチラシには、「年齢や性別、障害の有無などに関わらず、山科区にゆかりのひとたち約300人の『目を閉じた』写真を展示し、多くのひとがつながる場を生み出していく」というメッセージが続く。

そんなプロジェクトを静岡で実施する、それには遠距離ゆえの制約は避けられない。また、「わたしたちの住むまち」をどのように定めたらよいのか。広すぎてはならず、狭すぎてもいけない。。。静鉄新静岡駅に程近い、ギャラリーとリコ周辺のゆるやかな生活圏。そこは、市中心の繁華街、市役所、県庁、駿府城趾の公園、その周囲の病院や学校、さらに住宅地に連なる。成実は、それらの場所を「めぐるり」し、気になる人に声をかけカメラにおさめた。

「いろいろなひと」という意味では、そんな偶然の出会いに加え、ネットを使い、思い浮かぶキーワードを検索にかけ、団体や個人に接触を求めた。そこで結ばれた、県・市の社会福祉協議会、福祉と企業・地域を結ぶNPO法人、また静岡日仏協会などを起点に協力の輪が広がっていったという。

「目を閉じる」「まぶたを閉ざす」「瞑目する」、そして「目をつむる」。それらの言葉には、ネガティブな響きも含まれる。ただ「瞑目」が祈りに通じるように、「障害の有無などに関わらず、多くのひとがつながる場を生み出す」という成実の呼びかけに応えた人々のさりげない仕草は、かけがえのない生命（いのち）のボリューミーとなって来場者をつつむ。

白井嘉尚 静岡大学教授

乾久子



《くじ引きドローイング・ワークショップ風景》2016

分断する線。つなぐ線。

紙。純白な紙。その前で呼吸を整える乾久子を想像する。筆を執る。握る。無意識に手になじませる。呼吸を整える。そして来臨の時を待つ。その瞬間のやつて来るのを待つ。すぐにやって来るときもあれば、待てど暮らせど訪れないときもある。

音がする。耳に聞こえる音かはわからないが、確かに気配はある。音連れの時。やおら乾の手は、アイススケーターのように、紙の上へと滑り出して行く。乾によって出現する線は、砲丸投げのアスリートのように、外へ外へと向かって遠心力をつけながら弧を描く。中心に向かって収斂していく。また、サッカーのパスワークのように、変幻自在に軌跡を描く。名医の執刀のように音もなく紙の皮膚に切れ目をつくる。

線は、切れ目をつくる。空間をわかる。線分をつくる。内と外を露わにする。あちらとこちら、奥と手前を視覚化する。此岸と彼岸を創起させる。自分と他者を意識化させる。自らを他者と分けるからこそ、「自分」という。

そんな乾久子のドローイングには、緊張感漂う孤高の存在としての気配がキワだっていた。だが、乾は同じドローイングでも、「くじ引きドローイング」という新たな表現手段を手に入れた。そこでは「他者との関係」がより色濃くなつた。「わたし」と「あなた」のキワがどんどんみ出して溶け合っていく。これこそ乾の仕掛けた「キワドイ」の発露である。まことにもって愉快である。

ひとたび国際関係に目をやれば、人間は国境という危うい線に必要以上に固執する。1ミリたりとも相手に渡すものかと躍起である。滑稽である。一方、乾は、政治や民族の心の壁を取り払うために線を引く。国境をなくすために線を引く。みんなでいっしょに線を引く。最近では、「線量」という人間の生き死にに関わる線に心が動いている。乾の線は、分断する線ではなく、つなぐ線である。それは連綿と命をつなぐための線である。

平野雅彦 静岡大学特任教授

門田光雅



《10 colors》2015

門田光雅の作品について

優れた表現者は、用いる表現手段について自覺的であることは言うまでもない。表現するための手法や道具、材料などは先達によって探究、開発されてきた歴史的な産物であり、表現するということはその歴史性から逃れることはできない。そのことを踏まえずに、自らを創造者か何かのように思うのは、愚かなことであろう。アクリル絵の具のような比較的新しい画材の場合であっても、それは同じであるはずなのだが、無自覺にそれを用いて自分のオリジナルな表現だと言う浅薄な者は多い。しかも若い画家たちの多くが、油彩ではなくこのアクリルを用いる現況において、このことは深刻だと言わねばならない。

その点、門田はきわめて真摯な態度でアクリル絵の具に取り組んでいる。門田の作品を一目見るだけで、その多種多様なアクリル絵の具の表現、例えば多様な筆触、様々なメディウムの試行、どこか構造色を思わせるような独特な色彩、多層的な絵肌などなど、画材の探究が新たな絵画表現の可能性を拓いていることが了解されるのである。

さらに興味深いのは、門田がキャンバスを寝かして描画することが多いということだ。それを門田は「トラクターが畑を耕すような」と述べてくれたことがある。この喻えの意味は深い。なぜなら少なくとも2つの点で、伝統的な絵画表現を転覆する発想を含んでいるからである。一つは、西洋において絵画は窓の比喩として立てた状態で描かれ、鑑賞される表現であったこと。そしてもう一つ、油絵の具の可塑性は時にモチーフとして描かれる肉体の比喩でもあり、遠く聖顔布やイコンにもつながる絵画の起源や本質を想起させる問題でもあったこと。門田のアクリル絵画が、安易なイリュージョンに墮すことなく、かと言って肉体の牢獄のような束縛の重さとも無縁であるように感じられるのは、そのためであろう。であるなら、その耕作地にいかなる芽吹きがあるのか、鑑賞者は刮目せねばならない。

堀切正人 常葉大学准教授

株式会社大と小とレフ



《Until death do us part?》2016

業務内容：アートプロジェクトほか

昨今広がりを見せるアートプロジェクトは受け手（鑑賞者）の創作への積極的な関わりが特徴である。これはその創作現場がアトリエではなく一般社会であること強く関係している。社会包括の課題に取り組む福祉施設やシャッター通りと揶揄される中心市街地、過疎が進む中山間地域などがその現場になることが多い。アートはこのような地域社会の諸問題に関与しポジティブな状況変化を生み出すものとして期待されている。

株式会社大と小とレフは、アーティストのバックグラウンドを持つ鈴木一郎太と建築家の大東翼によって、このようなプロジェクトの企画・マネジメントを事業のひとつに据え2013年に設立された。住宅・店舗設計、セミナールーム「黒板とキッチン」運営など多種多様な案件を引き受け、よりクリエイティブな返答を試みている。

アートを推進する組織として通常想起するのはNPOや社団法人など公共性を持ち合わせた組織である。だが彼らはあえて株式会社という形態を選んだ。その理由は二つ考えられる。ひとつは一般社会における株式会社という名前が持つ信用。ふたつ目はアートを仕事として捉えているという意思表示である。つまり個人の趣味に思われがちなアートを社会へ位置づけしていく方法として、この組織形態を選んだのではないか。劇作家平田オリザが著書『新しい広場をつくる』の中で「社会における芸術の位置づけをあきらかにする」ことがアートマネジメントだと述べているが、彼らが実践していることはまさにこのことだ。

ただし彼らはアートと呼ばれていることだけをマネジメントするわけではない。いや、むしろそう呼ばれていない人々の創造性にこそ目を向ける。ジャンルというタグ付けを回避し、一見関係ないことを結びつけながらプロジェクトを進める。明確な活動よりもっと曖昧な行為に加担していく。それは社会の隙間や余白のような場で営まれているゆえに見えにくいものである。社会的意義を感じにくいこれらの行為だからこそ株式会社が取り扱う。この転回が社会との回路を大胆に開いていくはずである。

袖木康裕 オルタナティブスペース・スノドカフェ代表



『re rain』2016
傘、スピーカー、鍾、ワイヤー、電気コード、MP3プレーヤー、デジタルアンプ 可変



静岡で生まれ育った私にとってこの展覧会はとても特別な出来事です。
県立美術館は、子供のころからの遊び場でもあり、憧れの場所でもありました。
今回新たに作成した“re rain”はこの地に降る雨を収録し、この空間で形を変え再び放たれます。
物と現象の関係性、そしてこの地での思い出が雨のように僕に降り注ぎます。(岡本光市)

奥左
『shape of electric transmission』2015
鉄(クローム鍍金)、ゴム、白熱電球、電気コード
W600 × D400 × H1300mm

手前
『magnetic field record』2013
和紙、墨汁、ネオジウム磁石、
鉄、ワイヤー、ポリエチレン容器
W2500 × D2500 × H2000mm

奥中
『lighting chair』2012
木製椅子、銅箔、銅ガス管、配電盤(金鍍金)、
電気コードソケット、白熱電球
W1800 × D700 × H2000mm
presented by POLA ORBIS HOLDINGS INC., NPO Hexaproject

右
『weight of the light』2011
木、不燃布、石、鉄、ワイヤー、
電気コードソケット、LED電球
W1300 × D750 × H1800mm



岡本光市 おかもと こういち

1970年 静岡市生まれ 静岡市在住
1997年 オランダのテクノレーベル“X-Trax”よりリリース。
2012年 『switch —岡本光市遊びのデザイン—』／POLA MUSEUM ANNEX (東京)
2012年、2014年 ロンドンデザインフェスティバル／V&A Museum (ロンドン)



そもそもアートって“わかる”“わからない”で見るものなの?!

工芸的な陶芸の表現は歴史性やイデオロギー、素材理解など鑑賞者に知性を求める傾向にある。対照的に作品と鑑賞者に対話を求めるような感覚器官に直接訴える作品こそがアートの存在意義のようにも思います。好きな人、おいしい食事や心に響く音楽も同じことかと…

陶芸家は土を焼く

こだわるのは土の有り様と焼く行為だけ

大地から掘り起した土をろくろの上に置き、何を感じながら土に触れるのか?

焼き上がった土を展示室に置き、何を感じていただくか?

展示作品は芥川龍之介の『蜘蛛の糸』を題材に
物語の向こう側に見える自分を探したもの

人の救いとはどこにあるのか…

手で握りしめた土

その土で紡ぎだした閉じ込められた空間

浮いては沈み、流れる波に流れようとも

その想いはどこにとどまるのでしょうか

ほら、まだ見える一本の蜘蛛の糸

(前田直紀)



前田直紀 まえだなおき

1977年 藤枝市生まれ

2010年 藤枝市に穴窯窯炉

2014年 Argilla-Italia, Faenza, Italy

PENTIK gallery, Posio, Finland

2015年 バラミタミュージアム(三重)



ひらけば器 つつめば折り
(Spider's Thread) 2016

陶、漆

映像効果:
谷正輝「Spread」2015
カメラ、プロジェクター、リアルタイム映像、被写体環境



《MENTAL CHAIR VI》1995-2015
鉄、ウレタン塗料
H850mm × W1400mm × L1700mm

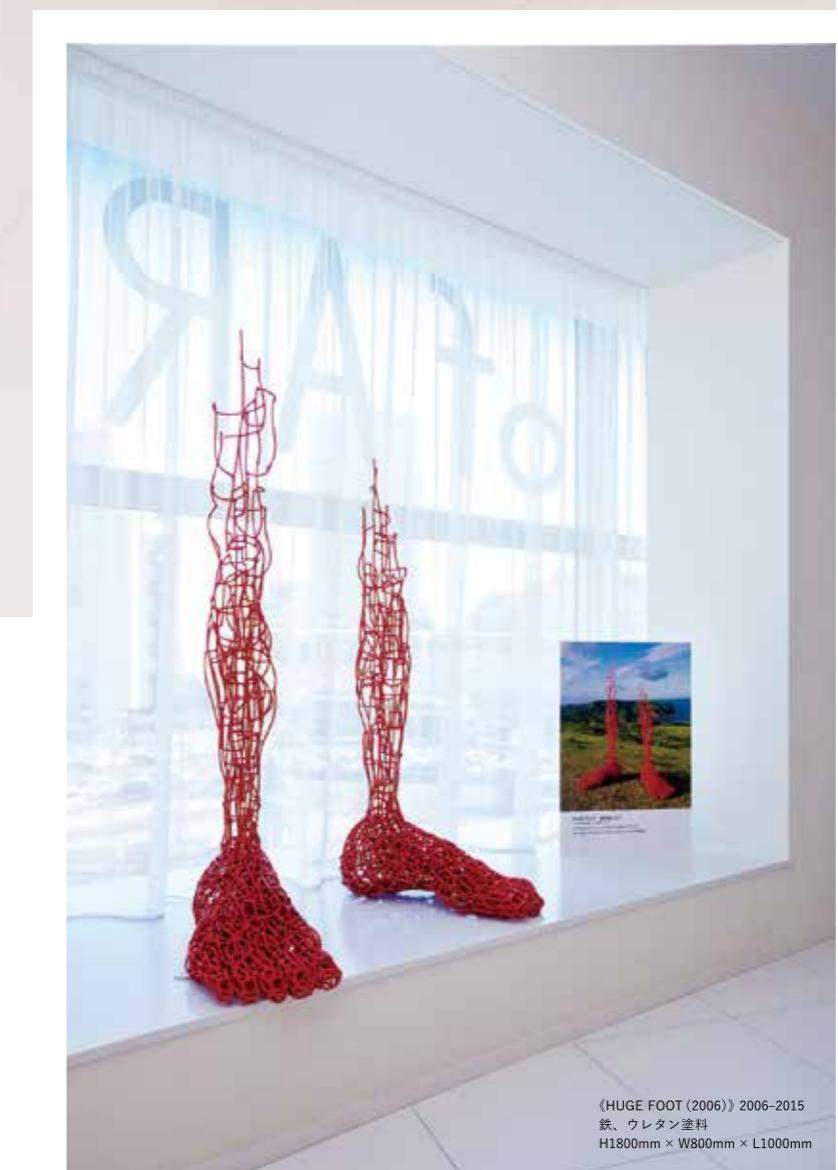


岩野勝人 いわの まさひと

1961年 徳島県生まれ 京都市在住
1990年 京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了
2008年 『IWANO MASAHITO 現代アートによる徳島再見』徳島県立近代美術館
2015年 『Erosion / Transfiguration —侵蝕と変容の先の関係性へ—』／瑞雲庵（京都）



《MENTAL CHAIR IX》1997-2013
鉄、ウレタン塗料
H1500mm × W1200mm × L1600mm



《HUGE FOOT (2006)》 2006-2015
鉄、ウレタン塗料
H1800mm × W800mm × L1000mm



「MENTAL CHAIR」は、赤い、人型の椅子である。頭はない。人が座ることで完成形となり、頭が一つ現れることになる。座った人の年齢や容姿、雰囲気も取り込んで、その「場」のイメージを変容させる作品である。それは座った「人」を支えるべき支持体であり、観賞される「彫刻」としての主体もある。

「HUGE FOOT」は、頭も胴体もなく、膝下だけの巨大な赤い脚である。見る人の視線はその脚が踏みしめる地面に。また逆に一本の線となり消えてゆく膝上の中空へと誘われる。天と地の間に立って、見る人の想像の世界でその脚は歩き出すことになる。

これらの作品、MENTAL CHAIRとHUGE FOOTのシリーズはこれまでにも様々な場所に設置してきた。画廊や美術館、海や山、公園や神社やお寺などの境内に持ち出しては、その空間の持つ特色に対して積極的に働きかけてきた。MENTAL CHAIRの置かれた場との対話を通して多くの人達とコミュニケーションをとることが出来たことに感謝している。そして、これから多くの「場」に連れ立って旅が出来ればと思う。新しい出会いを期待しつつ。今回、静岡では初めての展示となる。静岡の人達にこの作品がどのように映るであろうか。是非、見て、座って貰えたらと思う。MENTAL CHAIRに腰を下ろした時、この作品がどのように感じられるのかを実際に確かめて頂ければと思う。(岩野勝人)





《Rick Lien の偽造署名集》

《不確かな肖像》2016 ビデオ | 3分

《写場》

《Rick Lien の偽造署名集》2016
インストレーション

14

《写場》2014 映像インストレーション

私は長らくコンピュータグラフィックスを使い制作活動をしてきた。CGの目的の一つが、実写に近いリアリティのある映像を生み出すことである。しかしここには大きなジレンマが介在する。完璧なCGというものが存在するのであれば、おそらくそれはCGとは誰も気づかない。いかに高度な技術と労力を用いて制作したものであっても、単体ではCGとしての評価をされることはないのである。

私がこのジレンマに悩まされたのは大学を卒業する頃である。しかし考えていくうちに、私がCGに惹かれるのはそれのもつ自己破壊的な運命にあるのではないかと思うようになった。あらゆる技術を駆使して我々を欺こうとしながらも、どこかでそのほころびが露呈され、失敗に終わる。しかしそこに、本来の目的とは別の作用が働いていることに気づいたのである。それは破綻の直後、我々のリアリティへの感受性がいかに脆弱なものなのかを思い知らされるということだ。嘘によって本物であるはずのものの輪郭さえもぼやけて見えてくる。

今回展示した作品では、自己を証明する要素が身体から切り離され一人歩きを始める。そこに、我々を私たちにしているものが果たして存在しているのか。それは本物と呼べるものなのだろうか。(曾根光揮)



曾根光揮 そねこうき

1990年 牧之原市生まれ 東京都在住

2015年 六本木アートナイト／六本木各所（東京）

アジアデジタルアートアワード福岡 受賞作品展／福岡アジア美術館

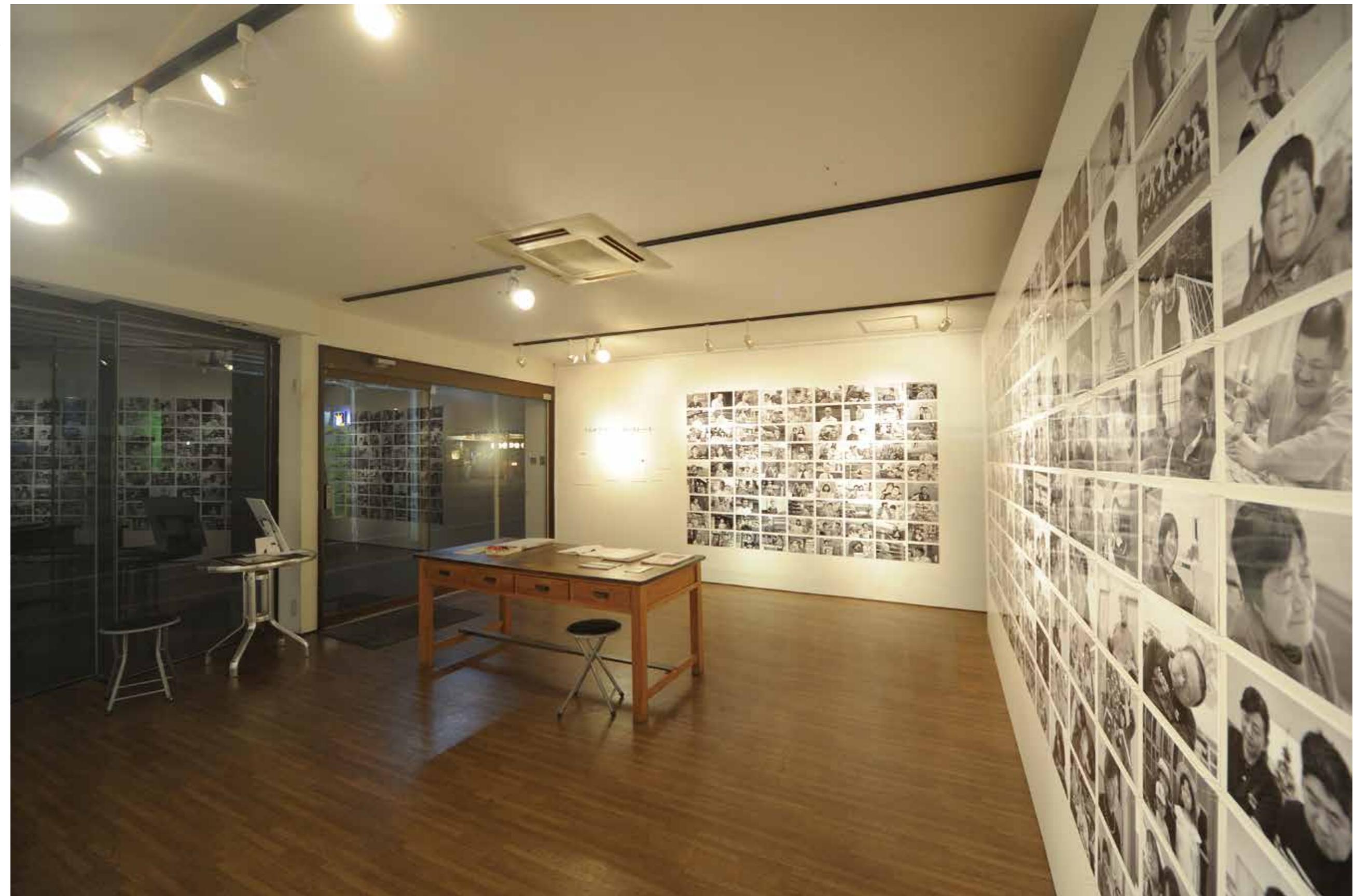
333 枚の「目を閉じた」写真。ここにうつっているのは、年齢、性別、国籍、障害の有無をこえて、この地に住まい、または縁のある、約 530 人々です。その多くは私が撮影しましたが、協力者が撮影してくださったものも含まれています。そのことで、新たなつながりが生まれることを求めました。

撮影を進めていく中で、出会った方々の多くは快く撮影に応じてくださいましたが、承諾を得るのにとても時間がかかることもありました。また、驚くような縁もあり、それら全てが私にとって素晴らしい経験でした。

「目を閉じた」写真には、自分では気づかない自身の表情や、普段見ることのできない他者の表情がうつし出されています。その表情を眺めると、自分自身や他者との距離がぐっと縮まります。

約四半世紀前になりますが、静岡で過ごした 4 年間の大学生活は、様々なひとや考え方方に触れる貴重な時間でした。再びこの地でたくさんのひとに出会い、支えられ、本展を開催できることに深い感慨を抱きました。

本展が、地域に住むひとたちのつながりを見つめ直し、さらには多くの「こころ」がつながる場となることを願いました。(成実憲一)



《ツムルツナガル ポートレート》2016
インクジェットプリント 173 × 260mm 333 点



成実憲一 なるみ けんいち

1971年 京都府京都市生まれ 京都市在住
1994年 静岡大学教育学部卒業
2012-13年 Genmo・1 番美術館／京都造形芸術大学ほか
2015年 ヤマシナポートレート／ラクト山科（京都）



くじびきドローイング・ワークショップ風景



くじびきドローイング作品

《福島と静岡 ワークショップ報告》

くじびきドローイング 静岡と福島をつなげてみて

2015年7月10日、津波被害の甚大だった福島県いわき市平（たいら）薄磯地区にあるいわき市立豊間小学校で、くじびきドローイングを行いました。芸術文化ことばの力で子どもたちの学力と生きる力を取り戻そうという「豊間ことばの学校」の取り組みのひとつとしてです。
ところで、このとき福島の子どもたちが初めてにひいたくじの言葉は、静岡の子どもたちが作ったものでした。がんばってくださいではなく、一緒に遊ぼう

ねの気持ちで書いたことばです。そして今度は福島から静岡へとこたが残されリレーが続きます。コミュニケーションをテーマにしたワークショップ、くじびきドローイングで、福島と静岡をつなげるはじめてのこころみでした。
いわきでも静岡でもくじびきドローイングを楽しむ姿を子どもたちは見せてくれました。ムチャぶりことばを絵にする楽しみ、ことばをつむぐ面白さ、くじドロにはどんな子も笑顔にする力があるようです。震災は運命であったかもしれません、子どもたちが受け入れるには大きすぎたものでしょう。くじの運命なら楽しく受け入れてもらえるだろう、私はそう希望しました。それは大人がしつらえたひとつの契機でしたが、子どもたちはそれを軽やかに超えて楽しんでくれました。そして同時に深いことばも残してくれました。震災からやがて五年を迎える今もまだ厳しい現実があることをあらためて知りました。その後福島との縁が広がり、原発事故によって全村避難となった飯舘村の生活の記憶を伝える「いいたてミュージアム」が同時展示の運びとなりました。福島と静岡の子どもたちをつなぎことばと絵のリレー、「いいたてミュージアム」とのことばの連環。何が見えたか。何がもたらされたか。考え続けていきたいと思います。
くじドロはつながりを広げ深めて旅を続けます。
(乾久子)

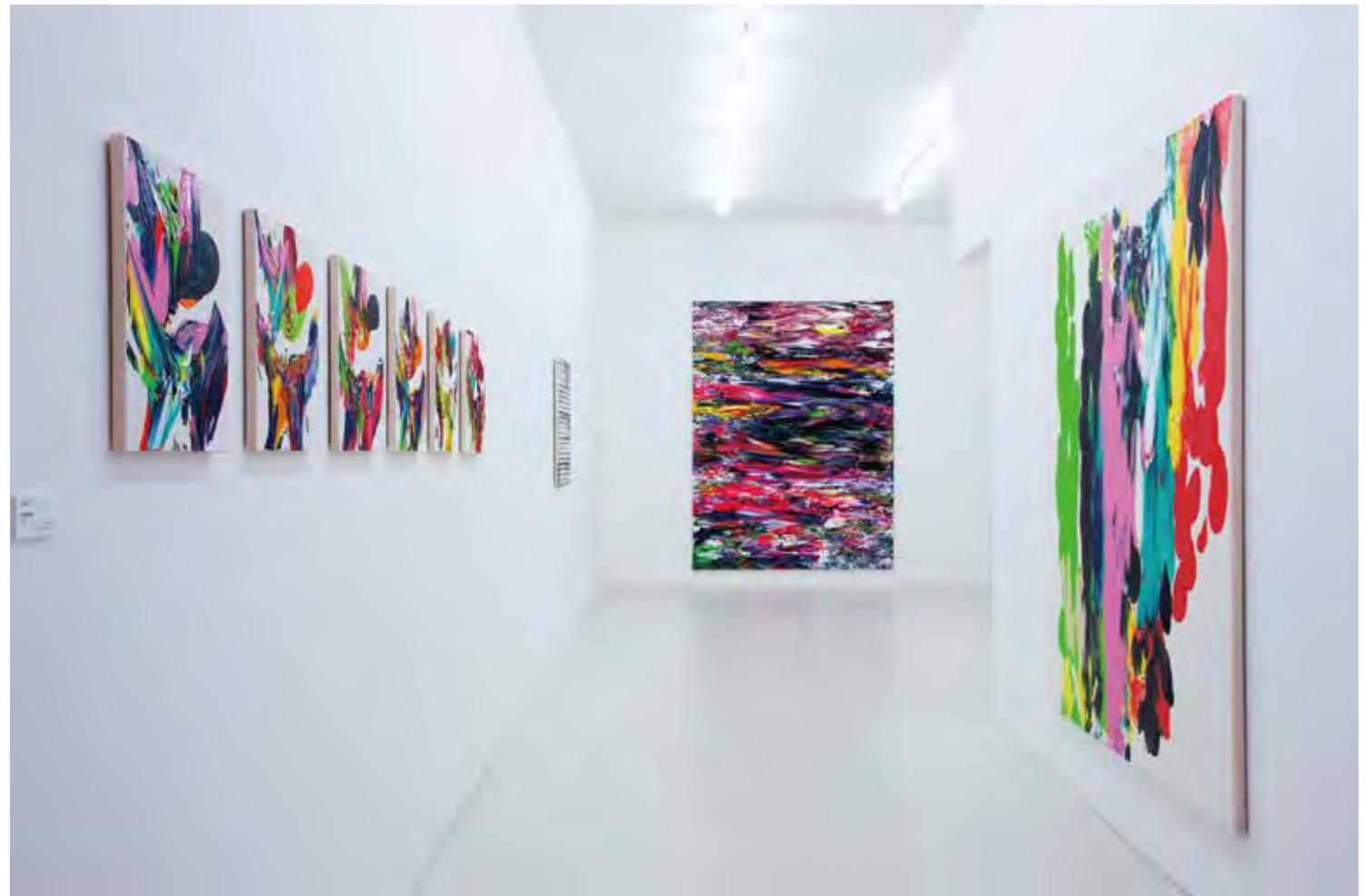


同時展示 いいたてミュージアム



乾久子 いぬい ひさこ

1958年 藤枝市生まれ 浜松市在住
1981年 静岡大学教育学部卒
1983年 東京学芸大学大学院修士課程修了
2007年 個展 "Das Erlebnis der Linien" Gallery Meta Weber / ドイツ
2008年から静岡、福島各地でワークショップ『くじびきドローイング』を多数行う

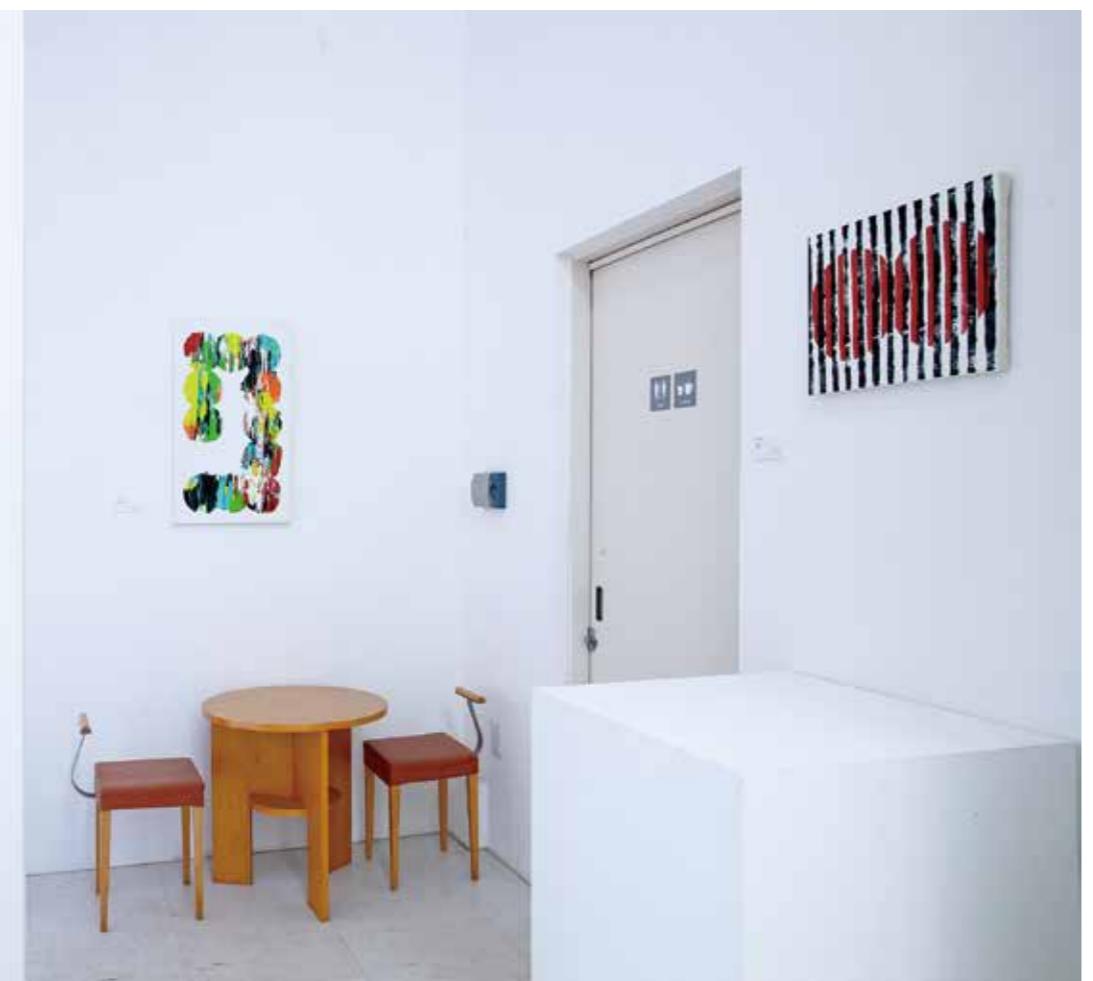


左前：《rhythm (No.01~06)》2016
アクリル、カーボランダム、綿布 45.5 × 38cm

左奥：《わだつみ》2015
アクリル、カーボランダム、綿布 80.5 × 65cm

中：《わだつみ》2015
アクリル、カーボランダム、綿布 259.4 × 194cm

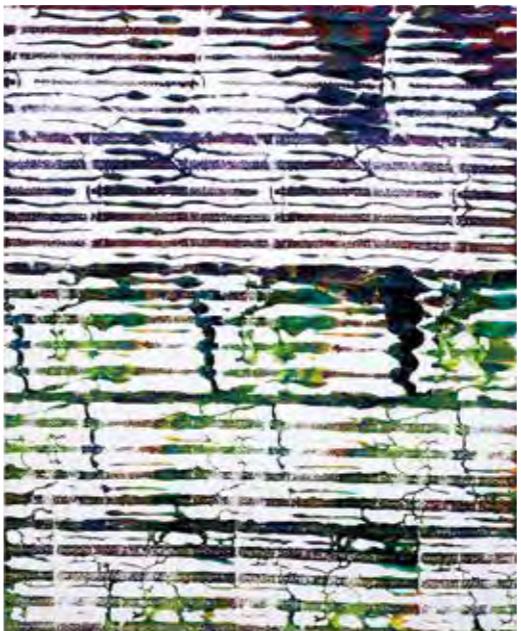
右：《松林 (9 colors)》2015
アクリル、カーボランダム、綿布 194 × 162cm



左：《be (04)》2015
アクリル、カーボランダム、綿布 33.3 × 24.2cm

中：《11の円 (03)》2016
アクリル、カーボランダム、綿布 70 × 41cm

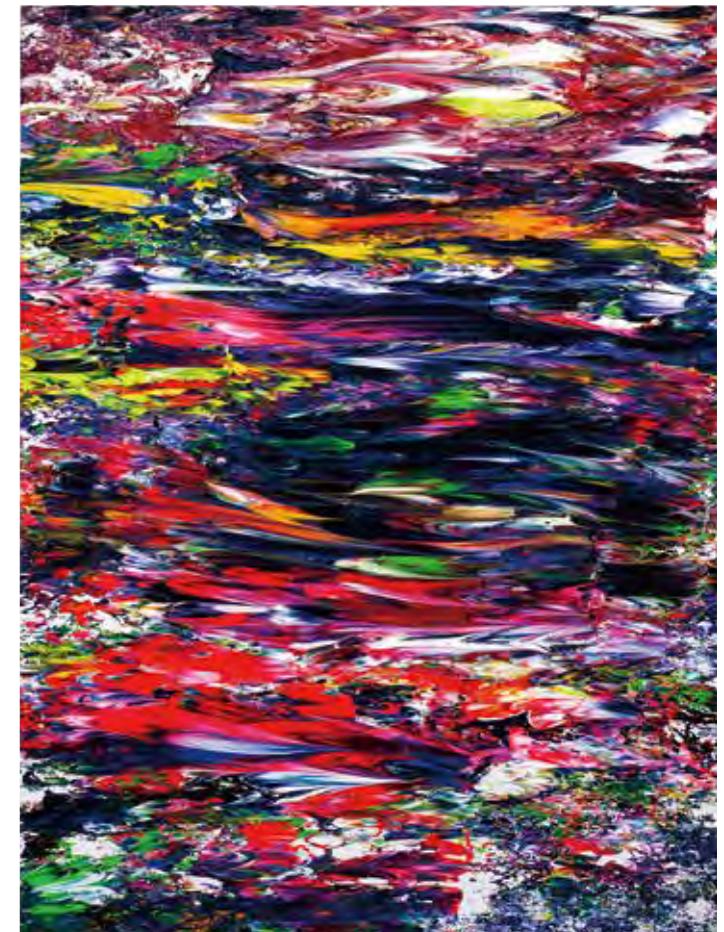
右：《秋分》2015
アクリル、カーボランダム、綿布 31.8 × 41cm



《わだつみ》2015
アクリル、カーボランダム、綿布 80.5 × 65cm



《鳥 (01)》2015
アクリル、カーボランダム、綿布 53 × 45.5cm



《わだつみ》2015
アクリル、カーボランダム、綿布 259.4 × 194cm

海のある町で育った。田畠を抜け、小高い防風林の丘を越えると、その先に海が広がっていた。近くの漁港から伸びる防波堤を伝っては、その先端で海を眺めた。膨大で揺がない質量を持った圧倒的な存在と光景。水平線から果てし無く押し寄せる波の歎りの傍らが、今日の私を育んだ場所だ。

実家は農家で、米と野菜を作っていた。幼い頃は祖父の自転車の後ろに乗って、田畠を巡った記憶がある。あぜ道や用水路、納屋や空き地が、恰好の遊び場で、蝶やカエルを追いかけた。私は母の実家で育った。

今日、私は絵を描いている。絵画は厚みの無い世界の中で、意味や想いといった「厚み」を求め、向き合う。私はそのような絵画が持つ不可思議な不合理が好きだ。聞ぎ合いと書き合い、歎りと調和、私はそれを色彩と筆触の関係性の中で探っている。私はいつもたじろぎながらも、その押し寄せてくるものを受け止めたいと思う。

留まらない揺らぎを手掛かりに、またそれらを同時に捉えるような、今日の私の中にも波打つその矛盾を描いている。(門田光雅)

出品作品一覧
《わだつみ》2015 アクリル、カーボランダム、綿布 259.4 × 194cm
《松林 (9 colors)》2015 アクリル、カーボランダム、綿布 194 × 162cm
《夕浜》2015 アクリル、カーボランダム、綿布 100 × 100cm
《わだつみ》2015 アクリル、カーボランダム、綿布 80.5 × 65cm
《11の円 (03)》2016 アクリル、カーボランダム、綿布 70 × 41cm
《鳥 (01)》2015 アクリル、カーボランダム、綿布 53 × 45.5cm
《rhythm (No.01~06)》2016 アクリル、カーボランダム、綿布 45.5 × 38cm
《秋分》2015 アクリル、カーボランダム、綿布 31.8 × 41cm
《be (04)》2015 アクリル、カーボランダム、綿布 33.3 × 24.2cm
《遊泳》2016 アクリル、カーボランダム、綿布 14 × 18cm



門田光雅 かどた みつまさ

1980年 袋井市生まれ
2002年 東京造形大学美術学科絵画専攻卒業
2008年 第23回ホルベイン・スカラシップ奨学生
2007年 『ART TODAY 2007 門田光雅・渡辺依理』セゾン現代美術館(長野・軽井沢)
2011年 『voca2011 新しい平面の作家たち』上野の森美術館(東京・上野)



株式会社大と小とレフ

大東 翼 おおひがしすく 鈴木一郎太 すずき いちろうた

大東 翼：1977年 兵庫県芦屋市生まれ

鈴木一郎太：1977年 浜松市生まれ

2013年 株式会社大と小とレフ設立（静岡県浜松市）

2014.4 セミナールーム黒板とキッチン 企画改装運営／浜松

2015.4 ふじのくに世界演劇祭 2015 出品（SPAC・静岡県舞台芸術センター）／静岡



人の意外な一面を知った時、その人の見方が変わったなんてことありませんか？

ツンデレもその一例ですが、それに対する反応は、それがポジティブなものか、ネガティブなものかに関係なく、一度タグ付けされたその人のイメージと、そこから逸脱した要素が一人の人間の中に同居していることに対する反応だろうと思います。それまでになかった組み合わせを拒絶するのか、なんとも思わないのか、ワクワクするのか。

一方、社会にある様々なタグ付けも便利に使えるものですが、時々私たちの社会はそんなにわかりやすかったかな、と不安を覚えます。様々なものが地続きで、わりきれないことだけの中で、選択するというのは、選択しなかったものを排除したことでもあります。選択は必要なことです。しかし排除に対して無自覚な選択の繰り返しは、よく知らないもの、必要だと思えないもの、わけのわからないものとの出会いを拒否する姿勢につながり、広い意味で環境への対応力を衰えさせているように思います。

異物と出会うこと

わからないものに向き合うこと

知らないものを読み解くこと

読み解きには数多くの視点があると意識すること

様々なものを地続きに捉えてみるとこと

予定調和的でない混ざり合いに期待すること

なんとかすること

人の意外な一面を知り高揚感を覚えるように、わりきれなさや異物と向き合うことの先にポジティブで進歩的な未来への道があると願っています。（株式会社大と小とレフ）

実習記録

「めぐるアート静岡」は、美術展であるとともにそのキュレーションを扱う実習である。

受講者はひとつの美術展ができるまでの一連のプロセスに参画することで、アートマネジメント能力を高めてゆく。美術展キュレーションという、高い専門性が求められ、また多岐にわたる内容を限られた時間枠（1回90分の実習14回）に収められるよう以下のポイントを抽出した。

- 1) 受講者企画キュレーションの実践。2) 展覧会コンセプトの共有、それを分かりやすく示す展覧会名の案出。
- 3) 作家と作品と会場との相関関係の把握。4) 作家・作品理解とその言語化。5) 広報計画及びチラシデザイン。
- 6) ギャラリートーク及びワークショップへの参画。7) 観客の感想等の把握。

6月下旬から自由参加の実習が始まり、正規の実習は、9月上旬から2月中旬にかけて計8回行われた。

それ以外にも、受講者は展覧会の成功に向けて様々な取り組みを行った。

【自由参加 I／III】

内 容：受講者によるキュレーション企画の募集
応募期間：2015年6月22日(月)～7月21日(火)
一次審査(書類審査)：2015年7月22日(水)～7月30日(木)
二次審査(公開審査)：2015年8月10日(月)10:20～11:50
担当講師：堀切正人(常葉大学准教授)が主担当となり、他の5名の講師が協力した。

【自由参加 II／IV】

内 容：作家による会場下見への周辺参加。
作家と交流しその視点、思考の一端に触れる。
① サルナートホール／株式会社大と小とレフ
2015年7月9日(木) 11:00～12:00
② ギャラリーとりこ／成実憲一
2015年8月24日(月) 15:30～17:00



Gallery PSYSで、アーティスト門田(手前)が、受講者に作品や資料を紹介し、展覧会への抱負を語る

【実習 1】

日 時：2015年9月7日(月) 13:20～17:30
会 場：静岡市美術館多目的室、サルナートホール、金座ボタニカ、Gallery PSYS
作 家：株式会社大と小とレフ、乾久子、門田光雅
講 師：堀切正人
以倉新(静岡市美術館学芸課長)
柚木康裕(オルタナティブスペース・スノドカフェ代表)
川谷承子(静岡県立美術館上席学芸員)
白井嘉尚(静岡大学教授)
平野雅彦(静岡大学特任教授)
受講者：13名
概 要：実習の概要紹介。4会場の下見と講師による作家紹介及び作家プレゼンテーションに参加。

【実習 2】

日 時：2015年9月14日(月) 13:30～17:30
会 場：静岡県立美術館講座室、同エントランスホール、GALLERY UDONOS
作 家：岡本光市、前田直紀、曾根光輝
講 師：川谷承子、以倉新、堀切正人、柚木康裕、白井嘉尚
受講者：10名
概 要：2会場の下見と3名の作家プレゼンテーションに参加。
受講者の役割について説明を受ける。
受講ノート：
実習は、作家の方や、キュレーターのお話をじかに伺えるので毎回ブレインストーミングな感じです。前田直紀さんが言った「アートコミュニケーター」という立ち位置が私にはちょっとしたユリイカでした。若手の映像作家、曾根光輝さんの《蚊取り線香》、NHKで見ました。牧歌的だけれども違和感がある。面白がった後に何か引っかかりを残す感じを、家まで持って帰ってきました。そのせいか、いまの自分のアートに対するときのキーワードがひとつ浮かびました。「ざわざわ」です。「ざわつく」感じとしばらく付き合っていきたいと思います。[受講者：鈴木理恵]



(上)展示会場としての静岡県立美術館エントランスホールを下見する
(下)GALLERY UDONOSでのアーティスト曾根光輝のプレゼン
ユニークな映像作品と、曾根のトークに受講者は引き込まれる

【実習 3】

日 時：2015年10月13日(火) 13:00～16:15
会 場：静岡市美術館多目的室
講 師：坂本陽一(デザイナー)、以倉新、堀切正人、川谷承子、柚木康裕、白井嘉尚、平野雅彦
受講者：11名

概 要：チラシデザインの初案検討、
展覧会名とサブタイトルの検討。
受講ノート：デザイナーの仕事は、企画をよく理解し、分かりやすくするためにあるということを実感しました。そしてサブタイトルの重要性を再認識しました。ロゴとの兼ね合いなど様々な要素が絡み合って、この作業の楽しさと難しさを感じました。[受講者：関聰子]



坂本デザイナーの提示したロゴとチラシ素案を手にとる受講者たち。チラシはA2の4つ折りをベースに、ポスターを兼ねる案など複数提示される。(中・右)展覧会の趣旨を再確認し、それを多くの人に伝わる言葉として提案。それを次々とホワイトボードに書き出してゆく。数十もの案を、投票で24案に絞り込む。サブタイトルは1つとする方向と、チラシ4つ折り各面に別のタイトルをつける案が検討され、決定は次回に持ち越すこととした

【実習 4】

日 時：2015年11月2日(月) 13:00～16:15
会 場：静岡県立美術館講座室
講 師：坂本陽一、堀切正人、川谷承子、以倉新、白井嘉尚、平野雅彦
受講者：11名

概 要：チラシデザインの詰め、サブタイトルの決定、
リード文の決定、その他チラシ文字情報の検討。
受講ノート：用紙サイズ、ポスター利用の有無、広げて見る時の見易さ、費用等について説明を聞き、横長でじやばら折りたたみ型に決定。サブタイトルは4つ設ける。サブタイトルの言葉にストーリー性を持たせ、「ちょっと、ざわざわ、しに行く」→「毎回どきっ！ドキドキ！」→「あるくるつなぐ」→「明日は誰とめぐりましょう。うふ」のように作品とサブタイトルとの内容が合うようにした。[受講者：大津裕子、永嶋和美]



チラシは横長のじやばら折りたたみ型に決定。メーリングリストによって8案に絞り込まれていたサブタイトルをさらに検討し、4つの言葉を使うことに決定

【実習 5】

日 時：2015年11月16日(月) 13:00～16:15
会 場：静岡市美術館多目的室
講 師：白井嘉尚、柚木康裕、平野雅彦、伊藤鮎(静岡市美術館学芸員)
受講者：10名

受講ノート：予算計画の大枠を確認した。広報戦略におけるプレスリリースについて、静岡市美術館の実例を参考に画像イメージを打ち出す内容に変更した。SNSの活用について検討し、第1回から継続してファンがいるFacebookを活用することとした。関連イベントの日程と内容を確認した。その後、「より多くの観客に働きかける仕組み」について意見交換を行った。チャーターバスの活用、ガイドツアーの実施等のアイデアが出された。[受講者：大石歩真、飯塚祥子]



プレスリリースについて検討する。静岡市美術館で実際に使われたものを示す伊藤学芸員

【実習 6】

日 時：2015年12月7日(月) 13:00～14:30、14:45～16:15
会 場：静岡市美術館多目的室
講 師：川谷承子、柚木康裕、白井嘉尚、以倉新、平野雅彦
受講者：15名

概 要：チラシ配布、スタンプラリーと会場めぐりのツアーについて検討。
会場掲示物の確認、作品搬入・展示作業及び会期中の受講者の活動について検討。
記録集編集計画の説明。
受講ノート：各作家の進捗状況について報告があった。看板、会場パネル、ノボリについて確認した。チラシが納品され、受講者にも配布された。チラシは静岡市美術館から1200件の宛先へ計2万枚が送付される予定。プレスリリースも県内及び全国紙、放送局、美術雑誌などにむけて発送される予定。
スタンプラリーに使うスタンプは、受講者が主宰する造形教室の子供たちに作ってもらうことになった。来場者アンケートは、昨年度のフォームを継続して使うこととした。各会場をめぐる「ツアー」実施について様々な可能性を検討した。[受講者：鶴田知志子、滝口詩乃]



会場めぐりのツアーについて様々な意見が出される

【実習 7】 【自由参加 V】 【実習 8】

展覧会会期中の実習。
2016年1月26日(火)、2月6日(日)、2016年2月14日(日)に実施。
静岡市内7会場の作品展示の実際について確認するとともに、8名の作家のアーティストトークに参加した。



2016年1月26日：静岡市美術館エントランスホールにおけるアーティスト岩野勝人のギャラリートークのコマ → P.27 アーティストトーク②

受講者企画によるキュレーションの実践

今年度は、受講者提案による企画が静岡県立美術館会場で開催された。

「受講者企画」の流れ

2015年6月4日 講師会議にて、受講者から企画案（美術作家を用いた美術イベントの企画）を募ることが協議される。募集要項作成。
6月22日～7月21日 募集。応募件数のべ7名、のべ7案。
7月22日～30日 一次審査（企画書の書類選考）、3案を選考。
8月10日 静岡大学にて3名によるプレゼンテーションおよび公開二次審査。
その結果、前田直紀の自薦案が採択される。ただし受講者との協働作業とすることが条件。
8月中旬～12月 前田および受講者有志がゆるやかに集いチーム前田を構成。
前田作品の理解と展示コンセプト、タイトル、内容、役割分担などを協議。
11月 前田が参加する国際陶芸フェルティバル in さまさ見学。
12月14日 前田による受講者むけのワークショップ
(アトリエ探訪、陶芸体験、アメリカンセラミックワークショップ)。
2016年1月 前田の制作補助（陶片を碎く、作品を各地の地中に埋めるなど）
会場：鈴木邸、藤枝市陶芸センター、静岡大学ビオトープ
ラジオ、情報誌、ブログ、フェイスブックなどでの報告、告知の展開。
解説文の執筆。
2016年1月3日 静岡県立美術館県民ギャラリーBにて展示テスト（映像作品との調整など）。
2月1日 搬入、展示作業。
2月2日～7日 展覧会の会期中は来観者案内（アテンダント）を分担。
2月7日 受講者司会によるアーティストトーク。
2月7日・8日 撤収、搬出作業。



2016年1月：前田の制作補助活動、作品を各地の地中に埋める
(左)静岡大学ビオトープ、(中)静岡市有形文化財古民家、鈴木邸、(右)中田島砂丘



2016年2月1日：受講者によるチームを挙げて、アーティスト前田をもり立てて展示作業を行う

受講者キュレーションチームとして留意したこと

本プロジェクトには、企画から運営に至るまで、多くの受講者が関わりました。限られた時間の中、様々な職種や立場から成るメンバーの提案を取り込んだ上で、前田氏の個展として成立させること、同時に、多様性を受け入れ流動的に変化していく面白さも失わないこと、その両方に留意しました。展覧会のヴィジュアルが鮮明になるにつれ、個々の専門・得意分野が自発的に活かされ、活気づいていく様子に、アートマネジメントの醍醐味を感じました。一連の活動を通して、皆さんとの間に、この先に繋がる信頼関係を築けたように思います。[中村美穂子（受講者：静岡県立美術館学芸課エデュケーションスタッフ）]

「受講者企画」に対する受講者の評価

プラン会議や作品制作、展示や設営撤収など、多くの人の協力と関わり合いの中で、施設管理者や作家、NPOなどチームの個の力を十分に発揮した活動ができたといえる。通常より時間と労力を要する制作にご理解を頂いた前田氏に感謝したい。一連の取組を通じた受講者間の強いネットワークが構築されたことは大きな財産であり、何より来場者の声から評価とともに一定の成果を得ることができたことが、受講者の大きな自信につながったといえる。[大石歩真（受講者：NPO法人クロスメディアアシッド）]



2015年8月10日：(上)企画についてプレゼンテーションをする受講者 (下) 公開二次審査風景



2016年1月：(上)前田の制作補助活動、陶片を碎く。(下)成形を終えた作品の群れ、藤枝市陶芸センター



2016年2月7日：受講者の大石がコーディネーターとなって、アーティストトークを実施 ⇒ P.27 アーティストトーク⑤

アーティストトーク

作家が、自らの作品／大切に思うこと／表現行為について語る。同時代のアートならではの瑞々しい時間。



トーク①：岡本光市



トーク③：株式会社大と小とレフ（鈴木一郎太代表）



トーク④：門田光雅



トーク⑥：成実憲一



トーク⑦：乾久子



トーク⑧：曾根光輝

[アーティストトーク I] 2016年1月26日㈭

トーク①：13:00-13:45 | 静岡県立美術館エントランスホール
アーティスト：岡本光市、コーディネーター：川谷承子
トーク②：15:00-15:45 | 静岡市美術館エントランスホール
アーティスト：岩野勝人、コーディネーター：以倉新
トーク③：16:00-16:45 | サールナートホール
アーティスト：株式会社大と小とレフ（鈴木一郎太代表）、
コーディネーター：柚木康裕

トーク④：17:30-18:15 | Gallery PSYS
アーティスト：門田光雅、コーディネーター：堀切正人

[アーティストトーク II] 2016年2月7日㈰

トーク⑤：14:00-14:45 / 16:00-16:45 | 静岡県立美術館県民ギャラリーB展示室
アーティスト：前田直紀、
コーディネーター：堀切正人、大石歩真（受講者）(14:00-を堀切が、16:00-を大石が行った)

[アーティストトーク III] 2016年2月14日㈰

トーク⑥：13:00-13:45 | ギャラリーとりこ
アーティスト：成実憲一、コーディネーター：白井嘉尚
トーク⑦：14:30-15:15 | 金座ボタニカ
アーティスト：乾久子、コーディネーター：平野雅彦
トーク⑧：16:00-16:45 | GALLERY UDONOS
アーティスト：曾根光輝、コーディネーター：柚木康裕

めぐるりツアー

「めぐるりアート静岡」は街に新鮮な眼差しを向けるためのレッスンでもある。今回は、街の記憶スポットに詳しい二人の講師の手引きによって、かくれた名所の回遊を試みた。広域にわたる8会場を「めぐるり」することは次の機会にゆだね、試みに、徒歩による静岡市中心部のみ実施した。今後、アートによる場の活性化と地域リソースの掘り起こしについて、より多面的な回路が開かれることを期待したい。

日 時：2月13日(日)午後1時からおよそ3時間程度

*講師と受講生チームによる予行演習を1月31日(日)に実施し、課題を検討した。

集合場所：静岡市美術館エントランス 岩野作品付近

コース：静岡市美術館～浮月楼～サールナートホール～ギャラリーとりこ～

宝台院～常慶町～藤右衛門町～寺町～七間町周辺～両替町～金座ボタニカ

参加人数：15名

講 師：齊藤隆（静岡ユネスコ協会常任理事）

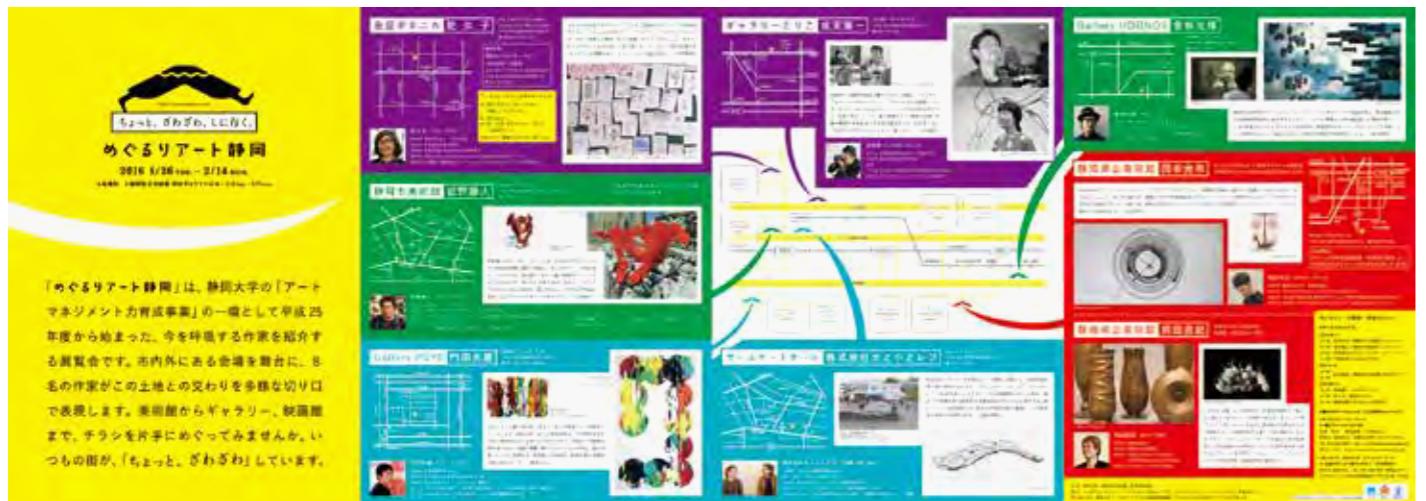
井上泉（プロジェクト「シズオカオーケストラ」発起人）



齊藤隆氏（左上）、井上泉氏（左上）
講師の語りによって、失われた街並みや人びとの営みが浮かびあがる。そして過去と現在が混じり合う

広報・広告戦略とツール

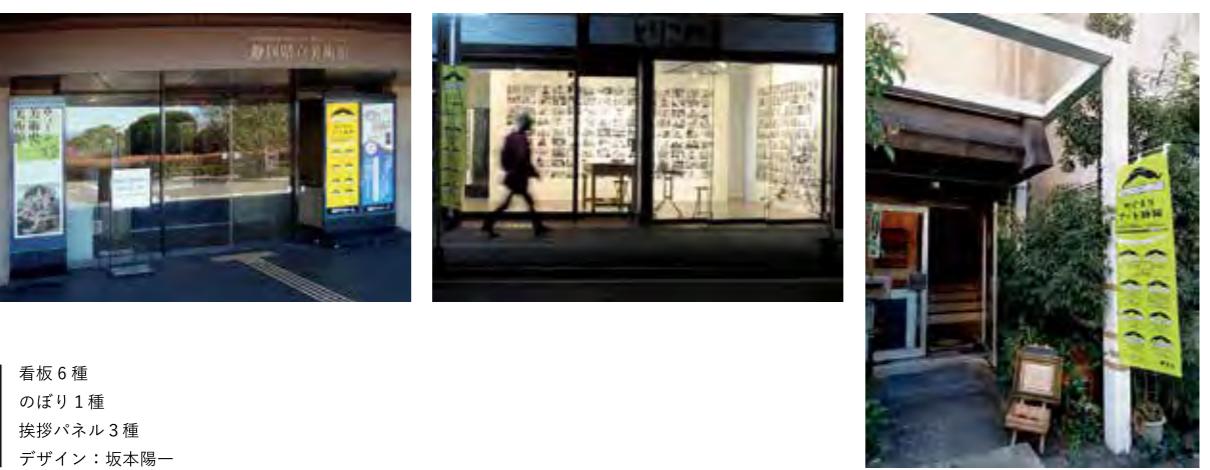
アートマネジメントにおける広報・広告戦略でもっとも重要で、かつ基本的なことは、いちばん伝えたいことはなにか、という原点に常に立ち返り、それをチームやアーティスト、デザイナー、鑑賞者と共有し続けることである。そして、作品の持つ力やコミュニケーションを通して、互いの価値観に変化を起こさせることである。ツールはその触媒と位置づける。



展覧会チラシ

チラシによって、市内に散在する会場への回遊を促すことが大きなテーマだった。デザイナー坂本は、富士山の形をした足が散歩しているかのようなシンボルマークの提示によってその問いに答えた。また今年度は、チラシにマップとスタンプラリー機能をもたせることとした。開けばポスター的な使い方もできるA2四つ折りのデザインを起点に受講者も交えて検討した結果、マップとしても使いやすい、A4サイズ×4の横長じやばら折りとした。

仕上がり寸法：A4／全幅：840mm
印刷：4色×4色／加工：外四つ折り加工
アートディレクション：坂本陽一
コピーライティング：受講者



看板・のぼり
看板 6種
のぼり 1種
挨拶バナーネ種
デザイン：坂本陽一

スタンプラリー

受講者が主宰する造形教室の、子供たちの工夫を凝らした消しゴムハンコが来場者を迎えた。



公式サイト、SNS

Facebookにも連動した本サイトは、8つの会場、8人のアーティストたちの各サイトやblogへもリンクされており、より最新の情報を整理して情報提供するツールとして重要な役割を担った。

公式サイト：<http://megururi.net/>
Facebookページ：<https://www.facebook.com/megururi.net>

ウェブデザイン：大村道彦



パブリシティ

各マスメディアの注目も集めた。

新聞：

- 『中日新聞』2016年1月27日朝刊
- 『静岡新聞』2016年1月27日夕刊
- 『静岡新聞』2016年1月28日夕刊
- 『SBSラジオ』IPPO、2016年1月26日8:30～8:40
- 『FM島田』2016年1月29日17:30～17:50

紙媒体雑誌：

- 『芸術新潮』ART CAFÉ [新潮社] 2016年1月25日
- 『地域情報誌 cocogane (ココガネ)』[NPO法人クロスマスメディアしまだ] 2016年1月25日
- 『Champ Magazine』Issue 11 (5月号に掲載予定)

webマガジン：

- 『CINRA.NETニュース』[株式会社CINRA] 2016年1月20日
- 『@S [アットエス] by 静岡新聞』2016年1月27日(水)17時30分配信 <http://www.at-s.com/news/article/culture/shizuoka/204801.html>
- 『the creators project』Feb 6, 2016 <http://thecreatorsproject.vice.com/blog/rain-sound-installation-umbrellas>
- 『designboom』Feb 8, 2016 <http://www.designboom.com/design/kouichi-okamoto-re-rain-installation-02-08-2016/>
- 他



「ライティングシア」を展示する
岡本陽一さん
→静岡市内の独立美術館

『静岡新聞』2016年1月28日夕刊



『中日新聞』2016年1月27日朝刊



『静岡新聞』2016年1月27日夕刊

（中止）

来場者の声



『めぐるアート静岡』は、「静岡から芸術を発信する場の創出」を目的とし、静岡市内外8会場の連携により、地域に縁のあるアーティストに舞台を提供することで地域が豊かになることを目指している。それが来場者にどのように受けとめられたのかを知ることは企画者にとって重要である。その手がかりを得るために各会場でのアンケートを行った。なお、アンケートの集計は受講者が担当し、分析は受講者と事務局で行った。

集計・分析の対象となったアンケートは、編集スケジュールの関係で3週間の会期中初めの2週間のみである。その間、静岡市内7会場に寄せられた回答は183件であった。基本情報は、①性別、②職業、③年齢、④住まいである。それに続く問1「来場のきっかけ」、問2「だれと一緒に来ましたか」までをチェックマーク方式で尋ねた。回答数、各項目チェックの有無、記述式

次に、記述式解答から一定の傾向を抽出したい。

めぐるアートのコンセプトについて

街をめぐる、楽しむ、発見する

- 会場にたどりつくまでのお話もまたいい思い出になるような(作品をふりかえる時間)、よかったです。[女／学生／20代／静岡市内／GALLERY UDONOS] 他
- 静岡の町を歩き、作品のある場所へ向かうことが特別な時間で特別な空間であった。[女／学生／20代／静岡市内／サルナートホール]
- もう少し小規模にしてほしい。廻れないです。[男／作家／30代／静岡県立美術館エントランスホール]

静岡に縁のあるアーティストに舞台を提供する

- 地元でがんばっている人がいると応援したくなるのでとてもよかった。[男／サービス業／40代／静岡市内／Gallery PSYS]
- 美術館では、昔の作品や有名な作品を見ることが多いので、若い世代の作家さんの作品を見られるのが新鮮だと思いました。[女／学生／20代／静岡市内／静岡市美術館]

作品について

ざわざわした／驚いた

- これまで見たことのない感覚になり、来てよかったです！なんかシゲキされた！[女／事務／30代／静岡市内／Gallery PSYS]
- 日常の思考を自分で深く感じるものでした。[女／音楽家／50代／県外（東京）／静岡県立美術館県民ギャラリー]

作品の多様性

- 近づいて見れば見るほど、色の混ざり合いや厚みに新たな発見を見出し、惹かれました。ずっといたかったです。[女／学生／20代／静岡県東部／Gallery PSYS]
- 視覚と聴覚のズレが面白い。[男／舞台関係／50代／静岡市内／静岡県立美術館県民ギャラリーA展示室]
- 造形美術の可能性をあらためて感じました。[男／60代／静岡市内／静岡市美術館]

参加型／双方向性のアート

- 椅子に包み込まれるようで不思議なすわり心地でした。[男／会社員／30代／静岡市内／静岡市美術館]
- 人とのつながりを近くに感じられる、楽しくて素敵な作品だと思います。[女／学生／20代／静岡市内／金座ボタニカ]
- 市の美術館の作品もそうでしたが、触れることができるというのは、いいと思いました。[男／教員／30代／静岡市内／サルナートホール]

その他、感想や意見

- おもしろいけどPR不足でもったいない。[女／50代／市内／静岡県立美術館エントランスホール]
- 受講生がどのような結果を出されているのかが見えにくい。[男／40代／静岡市内／GALLERY UDONOS]

【めぐるアートのコンセプトについて】第3回目を迎えたことで、多くの回答には、展覧会の特徴や方向性があらかじめ受け入れられていることが覗える。とりわけ、美術ジャンルの多様な展開やまた先端的な表現を、コアな観客だけでなくより広い人びとに結びつけるというねらいに対し、好意的な回答が多く寄せられた。

【作品について】さまざまな作品、多様なジャンルに触れることで、新鮮な驚きや、アートの可能性の広がりを感じたとのコメントが目立った。また、作品に触れることのできる展示や、観客参加型／双方向性のアートへの反応が多く見られた。

【その他、感想や意見】概ね好意的、建設的な意見が寄せられた一方で、「PR

受講者メッセージ



多様な文化芸術活動を支援する高度な専門性を有したアートマネジメント人材育成には、個人の能力開発という視点が欠かせない。同時に多様な価値観をもった人々と共同作業をして行くことで得られる知見もまた重要である。3年目を迎えた実習・美術では昨年の成果をもとに18名の受講者同士（内、文化施設職員8名）が議論し、講師陣やデザイナーと意見を交わすことで展覧会の理想を求めた。

県美「友の会」の30周年事業に向けてヒントを得たいと、この講座に応募したもの「アートマネジメント力」とは？具体的に何をすればよい？と暗中模索が続いた。複数の会場設営や作品制作の補助に関わり、多くの人と交流できて楽しかったが、展覧会企画に直接関わった充足感ではなかった。滅多にないチャンス、できることは最大限取り組もうと臨んだはずだったが。

取り組んだ、と言えるものを残したいと思い、広報手段としてのFacebook「めぐるアート静岡」の編集者に承認していただいた。多くの会場をめぐり、準備の様子やワークショップの紹介などを工夫し、読者が期待感を高め、実際に足を運んでくれるように努力した。アンケートの集計作業で「Facebookを見て来た」という回答を見るたびに、自分が発した情報が来場者につながったことを実感できた。

才能豊かな作家たち、発想力と高いコミュニケーション力をもつ受講者たち、有能な講師陣、それぞれのマンパワーを感じ、このつながりから生まれるもののがきっとある、大きな運動を生み出す側に入っていたい、と願うようになったのは大きな収穫だと思う。

大津裕子（静岡県立美術館友の会事業委員長）

今までアートを取り入れたイベントやワークショップをしたいと漠然と思っていたのですが、実際に何から手をつけて良いのか分からず、にいたところに今回のアートマネジメントの育成事業があることを知りよい機会なので参加させて頂きました。

講義の中では、美術館や博物館、劇場などの文化施設やアートを取り巻く現状、文化政策がどのように進められてきたか、アートに係る活動を支援する補助金について、最近話題の著作権の問題など、知っておいたほうが良い基礎的な知識を幅広く学ぶことが出来ました。

実習では、『めぐるアート静岡』という作品展を作り上げる過程において、作家さんとの打ち合わせや制作のお手伝い、チラシ作りやネットの利用など広報について、実際のイベントの運営を学びました。何も無い状況から構想が生まれ意見をぶつけ合い試行錯誤し作品と展示が形になっていくプロセスを実際に体験できたのはとても貴重でした。

また事業を通して多くの方と知り合うことができ、今後今回の経験や人の繋がりを大切にして何か新しい取り組みが出来たらと思います。

光後明人（自営業）

学生以来何十年ぶり、教室に座って授業を受けた。アートの視点から物事を見ることで、物も人もまったく違って見えてくる。固定観念を持たず、頭を柔らかくすること、また楽しむことの大切さを学んだ。講師の話を一言も聞きもらすまいと、紙いっぱいにメモを取った。学生時代にこれ程真剣だったらもっと違う未来が…いや、今だからこそ、これほど真剣に学びたいと思えるのかもしれない。

展示のサポートをする実習では、作家の真剣さがびりびりと伝わってきた。アートの生まれる現場の繊細な創造の瞬間をおもい、ドキドキした。その想いを壊さないようにしなければと、身が引きしまる気がした。

「めぐるアート」をめぐりながら気がついた…それは、この展示方法こそ、まさに、めぐる仕掛けの体験型アートではないか。「めぐるアート」が毎年開催され、静岡に根付いたアートイベントにならばらしいと思う。そして、アートマネジメントの学びを生かせる場として、講座の卒業生が活躍できれば、静岡のアートの裾野はさらに広がっていくのではないだろうか。

板倉りえこ（文化施設勤務）

ますます壊れてしまった。

あなたとわたしの境界が／つくり手と繋ぎ手と鑑賞者の合間が／物質とこころと時間の成り立ちの違いが、あかい網の固さとしなやかさ、まろやかな形体につつまれ／気づくと映像にとり込まれ／年齢も性別も国籍もなく／つむる目に、攻撃も防御もおそれもなく／雨音や振動の中に／繰り返したりのうちに／そそりたつ色のぶつかりのはざまに／何処からかやって来た、ひとつの言葉のときめきに／張り子でできた脱け殻の街をざわざわとまろびつ／あるいは、永遠の流れに併み／そっとちくれを降ろした余韻となって／名を無くす

アートが／出来っこないとおもっている・いろんな足枷を外し／すいすい泳いでゆく／うつくしい、日本のかたちとなつてわたしが渡しにならなくては。／平和裡に

天野恭子（高等学校非常勤講師）

不足」「もっと多くの人に来てもらって、楽しむことができたらよい」等の指摘も散見された。また、「毎年見ています」や「続けてほしい」など、この展覧会が地域に根付いて来たことを示す回答も少くなかった。

最後に、サルナートホールにおける、大と小とレフの展示には、監視員に向かって来場者から作品の意図が分からぬとの苦情が寄せられた。しかし、アンケートに記入した来場者は、賛否いずれにしても自分の言葉で感想を述べている例が多い。作品の解釈は与えられるものではなく、観客が思考をめぐらせ感性を振り動かすことが、アートに触れるという体験に他ならない。今後、「分からぬ→苦情」という短絡ではなく、「分からぬ→思考」というより豊かな回路を開いてゆくことを課題としたい。

「めぐるアート静岡」の実施にあたり、ご協力を賜りました左記の皆さまに心より感謝申し上げます。

海野農 椿原幸弘 大野仁志 下山晶子 大村道彦 齋藤隆 井上泉 渡辺六三志 佐野翔 杉村陽子 武田幸穂
鴨江アートセンター 静岡県社会福祉協議会 静岡市社会福祉協議会 NPO法人オール静岡ベストコミュニティ
静岡県障害者スポーツ協会 静岡市心身障害者ケアセンター 静岡日仏協会 福野市健康福祉部障がい福祉課
静岡大学イングリッシュユカフェ アトリエ・ニケ

実習の成果と課題

静岡大学によるアートマネジメント力育成事業の一環、美術展企画運営の実習として始まった『めぐるアート静岡』は、第3回をもって文化庁による助成期間を終了する。異なる組織や立場の講師6名による協働は一つの節目を迎えた。「次の扉」をどのように開くか、大きな課題が残された。

以倉新 静岡市美術館 学芸課長

絵に描いた餅は食えない。それでも（譬えは違うが）人はパンのみに生きるにあらず、昔は絵や彫刻は神を称え、世界を解き明かし、美しく有用なものだった。しかし現代では、美術は限りなく自由になって、もはや醜であることを辭さなくなつた。そんな時代を生きる美術家は、何を作るのか、何故作るのか、自ら問わざるを得ない。それは如何に生きるかを問うことでもある。ますます精緻になる今の世の中、食えない餅を描いて、答えのない問いを生きていこうというアーティストとアートを身边に感じることは、私たちに“自由であること”を思い出させ、ひいては社会を寛容にするのではないか。今回の8人の作品もそこに何を見るか、人は自分で感じ、考えてこそだろう。

川谷承子 静岡県立美術館 上席学芸員

『めぐるアート静岡』の前身の『むすびじゅつ』から始まり、計4回、地域と連携した現代美術展を実施してきた。はじめる前と現在とを比べて、大きく変化した点は、街の中で、顔を見かけると、互いに声をかけあう知り合いの数が増えた事である。この4年間で、所属や世代を超えたネットワークが広がり、美術館の外でアートについて語り合う時間と場所が出来た事は、何にも代え難い成果である。一昨年の、本事業の活動報告書に、地域が文化的により成熟するためには、批評が必要であるが、静岡には批評が不在である、と書いた。4年間の活動を経た、今言える事は、批評が先に在るのではなく、語り合う相手と、場があるところに、批評の言葉が生まれるということだ。

堀切正人 常葉大学准教授

受講者企画について、短い募集期間にも関わらず7案もの応募があったことは、アートマネジメント実習に対する潜在的なニーズと、その機会の少なさを現したものであろう。採択案は作家でもある受講者による自薦案であったが、他の受講者たちが主体性を失わず、自発的に様々な協働作業を展開したのは予想以上であった。だが、その成功は彼らの中に美術の制作や教育普及活動などに関わっている者が複数いたからであり、意欲があつても経験に乏しい者たちだけでは、マネジメント足りなかつたであろうこともまた自明である。アートマネジメント実習の機会増はもちろん、意欲を汲みつつ漸進的に実務経験を積んでいくための教育プログラムの開発が必要かもしれない。

柚木康裕 オルタナティブスペース・スノドカフェ代表

街に里山に芸術が展開され、作品と触れる機会が増えている。そこでは出会いの創出をもたらすが、しばしば問われるのは言説の不足である。また作品の評価が芸術と違うところでたびたび起こることは、有難いことであるが企画者が意識すべきことだ。これらの問題を補っていくためには対話の機会を多く設けることが有効であろう。その視点で『めぐるアート静岡』を眺めると、街を回遊させながら複数の個展が体験できることで芸術を語る言葉を多面的に与えていくように思う。芸術の本流が世間へ拡散していく昨今、オルタナティブの役割は逆説的に芸術に還ることではなかろうか。本展に参加している作家の展示への惜しみない情熱を見るにつけて、その想いは強くなる。

平野雅彦 静岡大学特任教授

「くじびきドローイング」は昨年に続き2年目の取り組みとなる。その劈頭にあって二つのことを念頭においた。ひとつは、『めぐるアート静岡』の会場を静岡市内に加え浜松へと拡張させること。もうひとつは、本取り組みがアートマネジメント力育成事業の一環であることを、受講者、アーティストと強く共有することだ。他の会場よりも2週間早くスタートを切る鴨江アートセンターでは、受講者らが早くから会場へ足を運び、空間や機能、いくつもの条件などをクリアにしつつ展示計画を立て、アーティストと会場に提案をおこなった。結果、浜松で生まれた展示アイデアはいくつも採用され、静岡会場である金座ボタニカへと引き継がれることとなった。

白井嘉尚 静岡大学教授

『めぐるアート静岡』は、文化庁助成によるアートマネジメント人材育成事業の一環、美術分野の実習として始まり3年が経過した。異なる組織の講師とさまざまな立場の受講者また多様な会場が、場を活性化する美術展の実現に向けて連携を重ねた。年を重ねるごとに人々に認知され、この地に定着しつつあるように思う。優れたアートは、見知らぬ人と人を結びつけ、自身のなかに潜む、見知らぬ自分に気づかせてくれる。そしてそれは、地域や未来に向ける新鮮な眼差しに通じる。異なる立場の人々が出会い交流することで、静岡の地が本来もっているはずの人材を生み育て集い、外と広く交流する力が押し広げられてゆくのではないかと思う。

平成27年度 文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業

「地方総合大学からの文化力発信プロジェクト」

—アートマネジメント人材育成による地域の文化芸術活性化に向けて—

「アートマネジメント実習B(美術分野)」

美術コース受講者:

青木明子、天野恭子、飯塚祥子、板倉りえこ、大石歩真、大津裕子、大森恵、光後明人、近藤悠左、
鈴木理恵、閑聰子、滝口詩乃、鶴田知志子、永嶋和美、中村美穂子、浜田真直、前田直紀、澤柳美千子

展覧会

めぐるアート静岡 ちょっと、ざわざわ、しに行く。

会期: 2016年1月26日～2月14日（一部会場は別会期）

（実習期間: 2015年9月7日～2016年2月22日）

主催: 静岡大学、静岡県立美術館、静岡市美術館、鴨江アートセンター（浜松会場のみ）

協力: サールナートホール、オルタナティブスペース・スノドカフェ、

Gallery PSYS、ギャラリーとりこ、金座ボタニカ

企画: 白井嘉尚（静岡大学教授）

川谷承子（静岡県立美術館上席学芸員）

以倉新（静岡市美術館学芸課長）

堀切正人（常葉大学准教授）

柚木康裕（オルタナティブスペース・スノドカフェ代表）

平野雅彦（静岡大学特任教授）

会場: 静岡県立美術館エントランスホール（岡本光市）

静岡県立美術館県民ギャラリーA展示室（岡本光市）

静岡県立美術館県民ギャラリーB展示室（前田直紀）

静岡市美術館エントランスホール（岩野勝人）

GALLERY UDONOS（曾根光輝）

Gallery PSYS（門田光雅）

サールナートホール（株式会社大と小とレフ）

ギャラリーとりこ（成実憲一）

金座ボタニカ、鴨江アートセンター（乾久子）

事務局: 一ノ宮由美

めぐるアート静岡 ちょっと、ざわざわ、しに行く。

記録集

発行日: 2016年3月11日

編集: 白井嘉尚、平野雅彦

デザイン: 坂本陽一 (mots)

写真: 遠藤幸廣 [p1, p10, p11, p14, p15, p22, p23]

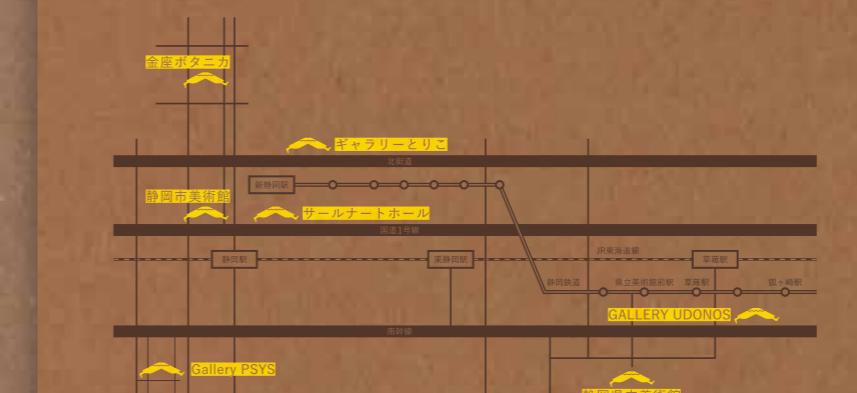
加藤和夫 [p12, p13, p18, p19, p20, p21]

大野仁志 [p16, p17]

山口有一 [p8, p9]

印刷: 松本印刷株式会社

発行: 国立大学法人 静岡大学 〒422-8529 静岡市駿河区大谷836



実習の成果と課題

静岡大学によるアートマネジメント力育成事業の一環、美術展企画運営の実習として始まった『めぐるアート静岡』は、第3回をもって文化庁による助成期間を終了する。異なる組織や立場の講師6名による協働は一つの節目を迎えた。「次の扉」をどのように開くか、大きな課題が残された。

以倉新 静岡市美術館 学芸課長

絵に描いた餅は食えない。それでも（誓えは違うが）人はパンのみ生きるにあらず、昔は絵や彫刻は神を称え、世界を解き明かし、美しく有用なものだった。しかし現代では、美術は限りなく自由になって、もはや醜であることすら辞さなくなってしまった。そんな時代を生きる美術家は、何を作るのか、何故作るのか、自ら問わざるを得ない。それは如何に生きるかを問うことでもある。ますます精緻になる今の世の中、食えない餅を描いて、答えのない問いを生きていこうというアーティストとアートを身近に感じることは、私たちに“自由であること”を思い出させ、ひいては社会を寛容にするのではないか。今回の8人の作品もそこに何を見るか、人は自分で感じ、考えてこそだろう。

川谷承子 静岡県立美術館 上席学芸員

『めぐるアート静岡』の前身の『むすびじゅつ』から始まり、計4回、地域と連携した現代美術展を実施してきた。はじめる前と現在と比べて、大きく変化した点は、街の中で、顔を見かけると、互いに声をかけあう知り合いの数が増えた事である。この4年間で、所属や世代を超えたネットワークが広がり、美術館の外でアートについて語り合う時間と場所が出来た事は、何にも代え難い成果である。一昨年の、本事業の活動報告書に、地域が文化的により成熟するためには、批評が必要であるが、静岡には批評が不在である、と書いた。4年間の活動を経た、今言える事は、批評が先に在るのではなく、語り合う相手と、場があるところに、批評の言葉が生まれるということだ。

堀切正人 常葉大学准教授

受講者企画について、短い募集期間にも関わらず7案もの応募があったことは、アートマネジメント実習に対する潜在的なニーズと、その機会の少なさを現したものであろう。採択案は作家でもある受講者による自薦案であったが、他の受講者たちが主体性を失わず、自発的に様々な協働作業を展開したのは予想以上であった。だが、その成功は彼らの中に美術の制作や教育普及活動などに関わっている者が複数人いたからであり、意欲があっても経験に乏しい者たちだけでは、マネジメント足りえなかつたであろうこともまた自明である。アートマネジメント実習の機会増はもちろん、意欲を読みつつ漸進的に実務経験を積んでいくための教育プログラムの開発が必要かもしれない。

柚木康裕 オルタナティブスペース・スノドカフェ代表

街に里山に芸術が展開され、作品と触れる機会が増えている。そこでは出会いの創出をもたらすが、しばしば問われるのは言説の不足である。また作品の評価が芸術と違うところでたびたび起こることは、有難いことであるが企画者が意識すべきことだ。これらの問題を補っていくために対話の機会を多く設けることが効果であろう。その視点で『めぐるアート静岡』を眺めると、街を回遊せながら複数の個展が体験できることで芸術を語る言葉を多面的に与えていくよう思う。芸術の本流が世間へ拡散していく昨今、オルタナティブの役割は逆説的に芸術に還ることではなかろうか。本展に参加している作家の展示への惜しみない情熱をみるにつけ、その想いは強くなる。

平野雅彦 静岡大学特任教授

「くじびきドローイング」は昨年に続き2年目の取り組みとなる。その劈頭にあって二つのことを念頭においた。ひとつは、『めぐるアート静岡』の会場を静岡市内に加え浜松へと拡張されること。もうひとつは、本取り組みがアートマネジメント力育成事業の一環であることを、受講者、アーティストと強く共有することだ。他の会場よりも2週間早くスタートを切る鴨江アートセンターでは、受講者らが早くから会場へ足を運び、空間や機能、いくつもの条件などをクリアにしつつ展示計画を立て、アーティストと会場に提案をおこなった。結果、浜松で生まれた展示アイデアはいくつも採用され、静岡会場である金座ボタニカへと引き継がれることとなった。

白井嘉尚 静岡大学教授

『めぐるアート静岡』は、文化庁助成によるアートマネジメント人材育成事業の一環、美術分野の実習として始まり3年が経過した。異なる組織の講師さまさまな立場の受講者また多様な会場が、場を活性化する美術展の実現に向けて連携を重ねた。年を重ねることに人々に認知され、この地に定着しつつあるように思う。優れたアートは、見知らぬ人と人を結びつけ、自身のなかに潜む、見知らぬ自分に気づかせてくれる。そしてそれは、地域や未来に向ける新鮮な眼差しに通じる。異なる立場の人々が出会い交流することで、静岡の地が本来もっているはずの人材を生み育て集い、外と広く交流する力が押し広げられてゆくのではないかだろうか。





<http://www.>

ちょっと、ざわ

めぐるリア

2016 1/26 tu

静岡市内外に散在する8ヶ所の